





# 暮らす人 働く人 訪れる人 想う人 大熊にかかわる人がつなげるみんなの町

令和5年、解体を前にした大熊町公民館で、古い公民館報の束を見つけました。昭和30～50年代に発刊されたものです。

東日本大震災の後、人も景観も、大きく変わる今の大熊町で、館報が伝える町の様子は、人によって、懐かしくも、新鮮にも映るでしょう。

令和6年11月1日、大熊町が誕生して70年になります。町は絶えず変化してきました。変わる町をつないできたのは、昔も今も、そこに生きる人たちです。

## 目次

発刊にあたって……………	2
公民館報はじまりの物語……………	4
公民館報からみる大熊町のあゆみ 昭和29年～昭和59年……………	6
昭和60年～現在までのあゆみ……………	20
大熊町人口・歳出額の推移……………	22
特集「くらし」……………	25
01 合併問題……………	26
02 家族／家計……………	30
03 インフラ／交通……………	32
04 民俗芸能……………	36

特集「なりわい」……………	41
01 稲作……………	42
02 農家の生活……………	44
03 果樹……………	46
04 その他の農業……………	50
05 畜産……………	52
06 漁業……………	56
07 商工……………	58
08 原子力発電所……………	60
特集「教育」……………	67
01 幼稚園／学校……………	68
02 健康増進……………	72
03 公民館活動……………	74
公民館報「214号」……………	78

【本誌の留意事項】  
 ・掲載している内容は主に公民館報に基づき記載し、一部で町史等を参照しています。公民館報の記事に明らかな誤りが判明した部分は修正を加えています。  
 ・公民館報の発刊日は、公民館報に記載のある期日を採用しています。

平成23年当時の大熊町



- ① 大熊町水産振興公社
- ② 県栽培漁業センター
- ③ 熊町小学校
- ④ 熊町幼稚園
- ⑤ 大熊中学校
- ⑥ JR大野駅
- ⑦ 大熊町役場
- ⑧ 大熊町公民館
- ⑨ 大野小学校
- ⑩ 大野幼稚園
- ⑪ 坂下ダム



# —先人の思いを今に、大熊町の物語—

このたび、大熊町町制施行70周年を記念し、大熊町公民館報を基に町の歩みをまとめました。記すのは、主に昭和30～50年代の大熊町です。

館報の創刊は1956年。合併から2年が経過するころです。第1号の小畑重町長(当時)の寄稿からは町内のしこりが伝わります。館報と同じ年に生まれた私は、生まれも育ちも「大熊町」ですが、町が一つになるまでは苦勞があったのだらうと感じます。

現在、町政を預かる立場として、70年の節目を町で迎え、「安心した」というのが正直な気持ちです。60年は会津若松市で迎えました。東日本大震災後の全町避難から3年あまり。当時、町の総務課長として、役場を置いた会津若松市と、町民の多くが避難するいわき市の2拠点で関連行事を執り行ったのを覚えています。

震災後、渡辺利綱前町長が「必ず町に帰る」と言った判断は、除染の進ちよくも不透明だった当時、苦しかったらうと思います。でも、あえてというよりは、「存続させねばなんね」と、私たちはその道を選んできました。町をなくせば先人に対して失礼じゃないかと思うからです。

「先人」というときに、親とともに私の頭に浮かぶのは志賀秀朗元町長です。私が若手職員だったころ、役場内で志賀元町長と行き会いました。ちょうど母校から寄付金の依頼が届いていて、私は「払うべきなのかな」と多少の疑問を持ちつつ、話題に出しました。志賀元町長は「吉田君な、君が今、活躍できているのはその高校を卒業したおかげだべ」と言いました。母校に感謝し、愛する気持ちを持つこと。「ああ、

そういう風に考えるものなんだ」と心に残っています。

故郷に対しても同じです。志賀元町長をはじめ、町をつくり、育て、残してくれた先人たちが残念に思うようなことはできない。震災後、正直、職務から逃げたいと思ったことはありません。町がなくなってもいいと考えたことはありません。

町は、2024年8月末時点で、推計1318人が居住するまでになりました。目指すのは住民4000人ですが、決して簡単な数字ではありません。今も昔も、人がいて、雇用があつて、納税されて、町は成り立つ。この春、有識者らによる全国の「消滅可能性自治体」の報告が話題になりました。被災地でなくとも厳しい現状を見据え、次の10年20年、その先も町が自立し存続していくために、一歩一歩町を作っていくことが大切だと思っています。

今回、かつての館報をたどり、私自身、改めて町の歩みを確認しました。自分が知っている大熊なんてほんの一部分です。歴史から何かを読み取って活かそうなど、大仰に構えるつもりはありません。ただ、自分の町が歩んだ道は知っておきたいと思います。知らなくては、いつか振り返りたい時にそれすらできないと思うからです。

皆さんにとつても、本誌が町を知る一つのきっかけになればうれしく思います。



第19代 大熊町長  
吉田 淳

2024年11月1日





# 公民館報はじまりの物語

## 大熊町公民館の誕生

1955(昭和30)年、町は公民館条例を施行し、大熊町公民館が生まれました。まだ館としての施設はなく、公民館活動のはじまりとしての発足でした。



公民館報 2号

「公民館物語」一体何をやるんだい(2号、昭和31年11月発行) 公民館が七月に発足して以来、一つの目標は町の融合強化でありました。互に名前や顔や性格を知り合う事が大事なのです。此の為に敬老会、体育祭、展覧会など一環の行事が持たれました。第二には諸団体や町の実態を知り必要な布石をすることでした。これからの目標は地道に組織化して行く段階だと思えます。

- ① 青年学級の組織と運営
- ② 婦人学級の促進援助
- ③ 部落公民館の設置促進
- ④ 町主要機関の連絡調整
- ⑤ 諸資料の調査整備等

公民館の目的を端的にいえば生



公民館での活動の様子

活上の問題を正面から取上げこれを解決しようとする積極的な精神や態度を養うことであり、現実の矛盾や不合理を自らの意志によって打開する人間たるべく住民の主体的な意志によって活動する私共の学校です。皆様と共に建設的な自己批判と相互批判の上に着実にあせらずに逞しく郷土振興への歯車を進めたいと思えます。(記事からの抜粋)

実際に活動が本格化した翌1956(同31)年に創刊されたのが「大熊町公民館報」です。創刊号の編集後記には、館報の担う役割や想いが記されています。



「編集後記」(公民館報 1号)

その後、少しずつ変化しながら、館報の発刊は2011(平成23)年3月の東日本大震災まで続きました。2023(令和5)年夏、解体予定の公民館の倉庫から昭和30〜50年代の館報が見つかりました。欠けている号もありましたが、6号以降の計86号が残っていました。1号と2号は、町の民俗伝承館に残されています。この冊子では、1号(同31年)〜126号(同59年)に掲載された記事を中心に、当時を知る町民の証言を加え、町の様子や変せんをたどりま



本冊子の基になった公民館報や「おおくま再発見」の記事(79ページ参照)等は、大熊町ホームページで公開しています。



歴代の題字



歴代紙面の一部

## 「町民の声」とともに歩んだ公民館報



元公民館報編集委員 鎌田 清衛さん(82歳) 野馬形区 R6.2.14 聞き取り

公民館報は「町の」ではなく「町民の」館報です。発刊には吉田農夫雄さんの尽力があったと思います。戦後、大熊町公民館の主事になった方です。

昭和30〜50年代、町では電気もやっと入ったくらいでしょう。水道もやっと。そういうつらさの中にあつて、公民館報は公民のもの。だから、当時としては画期的だと思ふけど、女性の声も多く入っている。

私が編集委員をやっていた当時、井戸川俊正さんが編集委員に加わりました。町の課長職を務めた人でしたが、井戸川さんが「行政は上意下達」って言ったんです。そして、公民館報では、そこに全

く背を向けようとしていた。行政の血が入った館報ではなくて、町民の声で出来上がって行くものが公民館報だ、と。農夫雄さんと同じでした。

農夫雄さんから言われて、一番強く残っているのは「年寄りの話を聞いておけよ」ということです。年寄りは、歴史を背負って、経験から生まれた言葉を話すのだから大事にしろよ」と。その農夫雄さんの言葉を、私は梨仕事が終わった夕方、公民館の薄暗い裸電球の下で聞きました。私にとって、公民館とはそういう場所でした。

どうか若い世代の皆さんにも、先人の言葉は粗末にしないでほしいと思います。理屈とか科学的とかいうことだけでは、体験に基づいた生活の知恵と重みがそこにあるはずなんです。そして、皆さんも自らの体験を重ねることを、どうぞ大切にしてほしいと思います。



# 公民館報からみる 大熊町のあゆみ

昭和29年～昭和59年

昭和29年11月1日 — 大熊町誕生

大野村・熊町村の合併により町制施行。11月8日には旧大野村議会議員16名、旧熊町村議会議員16名、計32名の議員により大熊町議会が発足。翌年、議員定数は16名に半減した。

## 人口・面積データ

「人口」8815人(男4310人、女4505人)  
 「世帯数」1550戸  
 「総面積」78.51キロメートル

12月3日 — 初代町長に小畑重氏就任

昭和30年12月28日 — 公民館発足、公民館条例を議決公布する

当初は公民館としての建物はなかったが、町民の自主的な学びや交流の柱となるべく大きな役割を担う。婦人学級、成人学級、青年学級、中央若妻学級、中央一般婦人学級、大熊町家庭教育学級等が続々と開設した。



若妻学級の調理実習風景



この話題をもっと詳しく知りたい!

▼特集テーマ「暮らし」  
 【合併問題】P.26



運営方針として西名清館長が掲げたのは、「町民の意見を聞きお互いに研究しあい、町の実情調査と課題解決に向かう」「教養文化の中心としての機能を発揮する」「各種団体の自主的活動と連携を通して産業振興と生活改善につなげ、明るい大熊町の建設に努める」というもの。町民とともに新たなまちづくりを担おうとする意気込みが感じられる。

1号(昭和31年8月)  
 「公民館の運営について」館長 西名清

この話題をもっと詳しく知りたい!

▼特集テーマ「教育」  
 【公民館活動】P.74

昭和31年8月30日 — 公民館報創刊

11月3日 — 第1回町民体育祭・町民文化展

町民が日頃の運動や文化活動の成果を披露する「町民体育祭・町民文化展」。町民の約半数である4000人を超える参加者でにぎわった。



公民館報1号

昭和33年8月20日 — 大熊町公民館落成

「八千町民の憩の家、町社会教育推進のよりどころ」として完成が待たれていた大熊町公民館は、大野小学校旧校舎の古材2教室分を再利用して造られた。資材の整理や運搬を町の青年団員や青年学級生が率先して行った。



昭和33年当時の大熊町公民館



町社会教育史上劃期的な偉業  
 公民館の新築なる

◆八千町民の憩の家、町社会教育のよりどころとして、中央公民館が落成した。  
 ◆大野小学校旧校舎の古材を再利用したと云い、確かに含み、根太、間柱などその姿。  
 ◆を見るだけで、雄姿は新築であり、大熊町創設の直感事として、総坪数六十五。

「町社会教育史上劃期的な偉業」と紹介された公民館の新築。総坪数65坪、総工費101万円。小会議室、事務室、日本間、図書室、講堂を備えていた。落成式で建築委員の一人は「町民各位の絶大なる協力により迅速に而も安価に出来上った」と感涙にむせびながら語っている。

10号(昭和33年10月)  
 「公民館の新築なる」

昭和34年3月20日 — 大熊町果樹選果場落成

12月3日 — 2代町長に小畑重氏就任(2期目)



この話題をもっと詳しく知りたい!

▼特集テーマ「なりわい」  
 【果樹】P.46



昭和34年3月30日



初めて公民館結婚式を行う

結婚式の簡素化を象徴する出来事として、公民館での結婚式が初めて行われた。「今後の結婚式挙行に対し重大な影響を与えるもの」として注目され、カメラマンが挙式の一部始終を撮影した。



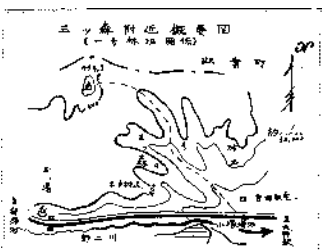
公民館結婚式の様子



10月13日

国有林第1林班を町有林に払い下げ

三ツ森山付近の国有林「第1林班」が、昭和34年10月に2378万円で国から町に払い下げられた。国有林は、藩や寺などが持っていた森林等が明治時代に国の所有となったもの。陳情書では「町の60%を占める山林の大半が国有林」とあり、第1林班に限らず、林業振興や建設資材調達のため払い下げを求めたが、資金不足などで難航する例もあった。



昭和36年4月24日

月おくれ盆の導入決定

社会の近代化にあわせ、旧暦で行っていた正月は、新暦の1月1日を元旦とする新正月に切り替えられていた。同様に、お盆は8月とする月おくれ盆とすることとした。



払い下げられた三ツ森山一帯は、昭和37年ごろから花木の植樹が進み、昭和45年時点で桜1万3000本、梅450本が香る町の名所になった。「三ツ森山の桜」は、大野駅プラットホームの名所案内版にも記載された。

63号(昭和45年5月)「観光行政 三ツ森の桜」

9月16日

町議会が東京電力原子力発電所誘致を議決

町議会の議決に先立つ35年5月、県は日本原子力産業会議に加盟し、大熊・双葉が原発の立地に適すると確認。町議会は県知事や東電に誘致を陳情していた。東電も大熊、双葉を最適地と判断し、町内夫沢地区の用地取得に動いていく。

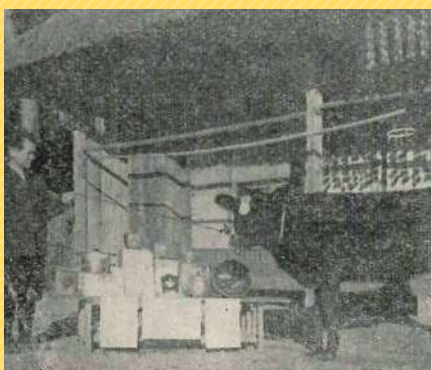
昭和37年1月14日

大熊町和牛研究会結成

関係者60人により「大熊町和牛研究会」を発足。「和牛飼養技術及び會員の和牛に関連する知識の向上を図り、農家経済の安定を期する」ことを目指した。



繁殖センターの牛群



第1回畜産共進会 優等入賞の「ひめゆり号」

4月1日

大野農協・熊町農協が合併し大熊町農業協同組合発足

対等合併で、組合長に旧大野農協組合長の石田真宗氏、常務理事に旧熊町農協組合長の西村正氏就任。かねてより言われていた「一町村一農協」が実現した。

12月3日

3代町長に志賀秀正氏就任

公民館結婚式  
始まる

公民館を会場に初めて行われた結婚式には多数の参列者があった。新郎は佐光宗十郎さん、新婦は武内美奈子さん。「公民館結婚式」は徐々に浸透し、22号(昭和36年3月発行)ではさらに紙面を割いて写真入りで紹介している。

11号(昭和34年3月)「公民館結婚式始まる」

この話題をもっと詳しく知る!

▼特集テーマ「くらし」  
【家族・家計】P30

月おくれ盆(8月)

の実施に協力しよう

昭和36年4月の区長会議において、月おくれ盆の実施を決定、町民への協力を呼びかけた。双葉郡地方町村会長からも各町長、教育長、公民館長あてにその励行の協力要請が届いたことから、双葉郡全体での取り組みだったことがわかる。

23号(昭和36年7月)「月おくれ盆(8月)の実施に協力しよう」

この話題をもっと詳しく知る!

▼特集テーマ「なりわい」  
【畜産】P52

発足した大熊町農協  
本来の使命達成に  
全力傾注

新役員は「組合員の経済生活を守り更に向上発展を期する」と挨拶。「近代化資金は農協から」「生産資材は農協から」「くらしの計画は農協から」をモットーに組合員へのフルサービスを誓った。

26号(昭和37年4月)「発足した大熊町農協 本来の使命達成に全力傾注」







昭和44年3月31日

### 大野小学校中屋敷分校廃止 スクールバス運行開始

昭和22年から22年間、子どもたちの学びの場となった分校は、在校生の減少により廃校が決まった。閉校式には8名の児童が出席。閉校後はスクールバスで本校に通った。



中屋敷分校閉校式

### 動き出した、みやま号

スクールバスの命名は大野小学校児童446人に公募。応募のあった500点の中から、3年生の木田るみ子さん、4年生の玉橋雅子さんの「みやま号」と名付けられた。

56号(昭和44年4月)  
「動き出した、みやま号」



4月10日

### 広域簡易水道事業完成

2年の歳月をかけて進められた水道事業が完成し、本格的な運用を開始した。加入数は1010戸。町内全戸への普及を目指す。同年6月5日には、完成記念式典が開かれた。

7月12日

### 大熊町スポーツ少年団結団式

熊町地区に10回、大野地区に7回、合わせて町内17回、655名のスポーツ少年団を結成。本部は大熊町公民館に併置された。



結団式の様子

11月1日

### 大熊町町制施行15周年

大熊町誕生から15年を迎え、記念式典が行われた。記念事業として町章を制定。「町制施行15周年記念町民体育の祭典」「町制施行15周年記念産業文化祭」を開催した。



町制施行15周年記念産業文化祭

この話題をもっと詳しく読み解く！  
▼特集テーマ「くらし」  
【インフラ・交通】P.32

大熊町  
スポーツ少年団  
結成される  
少年教育はスポーツからをモットーに、公民館では体育指導委員と町内小・中学校が協力してスポーツ少年団の育成に踏み切った。  
57号(昭和44年6月)  
「大熊町スポーツ少年団結成される」

「伸びゆく大熊町を象徴する町章」を町内から募集し、総数102点の応募の中から、吉田定一氏の作品に決定。「大きくま」の3文字を圖案化し、円形は平和を、翼型は産業文化の発展と飛躍の姿を表現している。  
60号(昭和44年11月)  
「町章を制定」

昭和45年5月1日

### 熊町小学校内に熊町幼稚園開設

6月

### 熊町小学校新築落成

鉄筋コンクリート2階建の新校舎は、昭和41年に着工し、約5年の歳月をかけて完成した。12の普通教室のほか特別教育室、衛生室、給食室など、近代設備を備えた校舎となった。

### 熊町小学校 新築落成を祝す

教育長が「近代設備を誇る『トラックスな教育の殿堂』と称した熊町小学校の新校舎。特に給食室は面積が81㎡あり、熊町中の給食も担当して地区の学校給食センターの役割も果たした。  
64号(昭和45年7月)  
「熊町小学校新築落成を祝す」

9月14日

### 第1回町民号



大野駅を発つ第1回「町民号」



### 年中行事にして欲しい！ 第1回 町民号大好評

身近になつた水戸黄門  
九月十四日、第一回町民号 された。佐竹家が相馬家と親が茨城県太田市を訪れた。 類筋であり明治維新当時の佐  
参加者アンケートの集計を見ると、「非常に良かった」よかったが合わせて77.5%と、とても好評だった。参加した一人、持田虎之助さんは「本  
当によい旅行に参加出来」と感謝を伝えている。  
65号(昭和45年10月)  
「年中行事にして欲しい！ 第一回町民号大好評」

12月3日

### 5代町長に志賀秀正氏就任(3期目)

昭和46年1月22日

### 電話が自動交換方式に切り替え

3月26日

### 東京電力福島原子力発電所1号機営業運転開始

6月1日

### 広報おおくま創刊号発刊



昭和46年7月17日 — 大熊町公民館新築落成

昭和33年に公民館が建てられてから13年、大熊町の社会教育を進める新たな拠点となる公民館が完成。新築に向けては教育委員会や町民からの要望書、請願書が数回にわたって出されていた。

昭和47年5月1日 — 大野小学校内に大野幼稚園開設

6月29日 — 大野病院全面移転診療開始

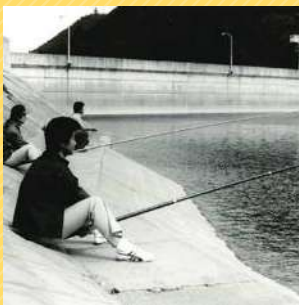
昭和26年に開設され、地域医療の中核を担ってきた県立大野病院は、老朽化した建物設備を一新するため全面改築した。鉄筋コンクリート2階建て、病床数は165床。



大野病院全景

10月2日 — 大野駅に特急電車停車

昭和48年3月23日 — 県営坂下ダム完成



坂下ダムで釣りを楽しむ人々

4月1日 — 熊町・大野中学校が統合  
町立大熊中学校に

昭和49年7月18日 — 東京電力原子力発電所2号機営業運転開始

9月25日 — 町民体育館落成

町民の体力づくりの場として、町は総合スポーツセンターを整備する事業に取りかかった。52年に増健センターがオープン、58年までに野球場、テニスコート、武道館、プール、総合グラウンド等が次々に完成した。



町民体育館の地鎮祭の様子

11月1日 — 大熊町町制施行20周年  
記念碑を公民館前に建立

12月3日 — 6代町長に志賀秀正氏就任(4期目)

昭和50年3月20日 — 統合中学校完成

大熊中学校の新校舎が落成し、大野分室、熊町分室が統合。中央台自然公園の一角に建てられた新校舎は、鉄筋3階建と2階建の建物からなり、新たな学びの場所となった。



新しい設備での理科の授業風景

昭和51年3月27日 — 東京電力原子力発電所3号機営業運転開始

### 大熊町公民館

要請書一回、町民請願二回、議会議決三回いよいよ落成に踏み切る

昭和33年8月1日、大熊町公民館は落成。この間、現館前の旧三丁に、大熊町公民館の前身として、大野町の公民館が開設された。

最初の公民館が建てられた年の大熊町新市町村建設基本計画には「十年後には町の発展に伴って社会進展に応ずる近代建築を行うものである」と書かれている。13年後の公民館新築は、それを裏付けるものとなった。

64号(昭和45年7月)

「大熊町公民館」

## 地域医療の殿堂 県立大野病院



「地域医療の殿堂 県立大野病院」

建物には本館に加えて、看護宿舎、併設隔離病舎も完備された。病床数の内訳は、一般96床、結核54床、伝染15床。医師不在のため休診していた外科診療を再開し、診療科目は内科、外科、産婦人科となった。

92号(昭和51年10月)

「地域医療の殿堂 県立大野病院」

この話題をもっと詳しく読み解く!

▼特集テーマ「教育」  
【幼稚園・学校】P.68

## 町民体育館着工

大熊町民待望の町民体育館が、この程大熊町沢字中央台八七三番地内に着工した。

町民体育館の敷地面積は7万7000㎡、建物面積は1065㎡、総工費は8400万円となっており、富岡町の原建設株式会社が工事を請け負った。

77号(昭和48年12月)

「町民体育館着工」

## 我々が誇る教育の殿堂 大熊中学校

人物資源開発への悲願

新校舎の建築整備には教師たちも協力し、その経験と知識が取り入れられている。高台に建つ校舎の屋上からは発展する町内や遠くの野山が望め、「自然と現代文化の融け合いの中に近代的な情操を培う」ことができる学習環境が整った。

87号(昭和50年10月)

「我等が誇る教育の殿堂 大熊中学校」



昭和52年3月30日 | 大野幼稚園園舎完成



初の町民マラソン大会を実施  
4kmコースは中学生の部、一般女子の部、壮年の部、8kmコースは高校生の部、一般Aの部、一般Bの部を設けて開催された。参加者からの好評を得て、その後毎年開催される恒例行事となった。



第1回大会の様子

12月20日 | 役場新庁舎竣工

下野上地区に役場新庁舎が完成し、業務を開始した。翌53年2月に落成式が開かれた。

昭和53年3月19日 | 大野婦人会、熊町婦人会が合併、大熊町婦人会結成

結成総会は、大熊町役場庁舎において盛大に催された。初代会長には前大野婦人会長の木幡キサ氏が就いた。

3月20日 | 熊町幼稚園園舎完成

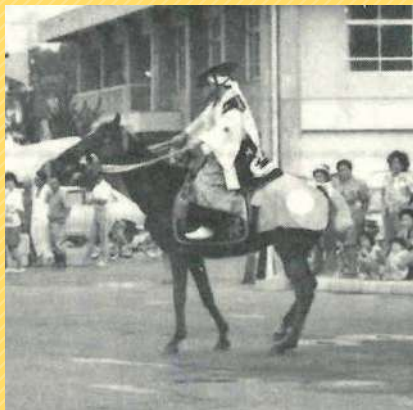
3月31日 | 公民館報100号発刊

創刊以来、刻々と変化する町の情勢や町民の声を届けてきた公民館報が、発行から22年を経て、100号を迎えた。毎号の記事一つ一つに町の歴史が刻まれている。

7月23日 | 大熊町騎馬隊結成、出陣



大熊町騎馬隊として相馬野馬追に8騎が出陣し、戦国絵巻を繰り広げた。凱旋の途についた一行は数百人の町民に迎えられ、大野駅前から役場前広場まで堂々と行進。万雷の拍手を浴びた。



大熊町役場前から出陣する騎馬隊

10月12日 | 東京電力福島第一原子力発電所4号機営業運転開始

12月3日 | 7代町長に志賀秀正氏就任(5期目)

昭和54年8月6日 | 志賀秀正町長逝去

昭和37年に町長就任以来、17年にわたって町を牽引してきた志賀町長が、5期目半ばにして逝去。志賀氏は明治40年生まれ。熊町役場職員、大熊町役場収入役、助役を経て町長となり、ふるさとの発展に尽くした。



志賀秀正文庫

9月25日 | 8代町長に遠藤正氏就任

昭和55年4月1日 | 町民憲章の制定

マラソンで第2回目を迎えた町民マラソンは穏やかな天候に恵まれた。午前10時、大野病院前をスタート。北向を経由して野上(山神前)を折り返すコースを走り抜けた選手たちを「スポーツで鍛えた美しさがみなぎっていた」と讚えた。



地点の力点ぶり

大熊町誕生から20周年を迎える大熊町婦人会、熊町婦人会はそれぞれ活動してきたが、合併の気運高まり、大熊町婦人会が誕生。結成総会は志賀秀正町長、高野昭二公民館長も出席して盛大に行われた。

103号(昭和54年1月)「マラソンで体力づくり」

大熊町誕生から20周年を迎える大熊町婦人会、熊町婦人会はそれぞれ活動してきたが、合併の気運高まり、大熊町婦人会が誕生。結成総会は志賀秀正町長、高野昭二公民館長も出席して盛大に行われた。

100号(昭和53年3月)「大野・熊町婦人会が合併」

高野昭二公民館長は、100号を迎えるまでの間、編集に携わった多くの町民、そして読者である全ての町民に感謝の言葉を述べている。さらに「館報の200号、500号、そして1000号が無事発刊されること」を祈念した。



100号(昭和53年3月)「館報100号の発刊に当たって」

大熊町が産んだ偉大な政治家志賀秀正氏を偲んでハケ月志賀秀正氏の遺志として、遺族から町に100万円を寄贈があり、町では「志賀秀正文庫」を公民館の図書室内に創設。「地方まねに見るような名実ともに充実した図書館」をつくる構想を練っていた氏の思いに報いた。

### 志賀秀正文庫 公民館に開設

大熊町が産んだ偉大な政治家志賀秀正氏を偲んでハケ月志賀秀正氏の遺志として、遺族から町に100万円を寄贈があり、町では「志賀秀正文庫」を公民館の図書室内に創設。「地方まねに見るような名実ともに充実した図書館」をつくる構想を練っていた氏の思いに報いた。

109号(昭和55年3月)「志賀秀正文庫 公民館に開設」

#### ◎大熊町民憲章

私たちは、美しいあぶくまの山なみと青い海、清らかなくま川の流れにはぐくまれた大熊町の町民です。私たちは、先民の遺業を受けついで、豊かな生きがいのある住みよい町をつくるため、ここに町民憲章を定めます。

- ・健康で楽しく働ける、豊かなまちをつくりましょう。
- ・みんなで助けあい、明るいまちをつくりましょう。
- ・きまりを守り、平和な住みよいまちをつくりましょう。
- ・自然を愛し、きれいなまちをつくりましょう。
- ・進んで学び、香り高い文化のまちをつくりましょう。



昭和56年6月23日

### 熊川運動場開き

熊川の河川敷に運動場が欲しいという地元住民の強い要請を県が認可。整地の資金集めに難航していたが、地元有志らの献身的な努力や、それに同調した地元建設会社らの協力により無事完成した。



記念祝賀として開催された「ソフトボール大会」

7月30日

### 農村環境改善センター完成

昭和57年3月25日

### 大野小学校完成

約2年かけて進められてきた町立大野小学校が竣工となり、併せて屋内体育館も完成。大野小学校の竣工により、教育環境のさらなる充実が実現した。



完成間近の大野小学校

### 体と鍛えよう

健康な体を保持するには、日頃の運動が大切である。大熊町では昭和四十九年度より助民の体力づくりの場として、中央台一帯に総

電源三法交付金によるスポーツセンター等の開設をはじめ、武道館(弓道場)、熊川運動場、研修や実習等に利用できる農村環境改善センターなど、この時期、町内の施設が充実していった。健康増進を目指しトレーニングにいそむ町民の姿が表紙を飾る。

93号(昭和51年11月)  
「体を鍛えよう」

### 旧校舎で最後の卒業式

明治二十六年に開校された児童の教育の場として、親しまれてきた大野小学校



明治26年に開校し、児童の教育の場として親しまれてきた大野小学校旧校舎で最後の卒業式が行われた。卒業生は62名。大野小の伝統は新校舎に引き継がれる。

119号(昭和57年3月)  
「旧校舎で最後の卒業式」

昭和58年1月8日

### 移動図書館車ひまわり号納車



納車を祝う町民たち



移動図書館車ひまわり号

### 移動図書館車ひまわり号



「いすゞ・エルフ・フラットローバン」を改造して外架式書架を配した図書館車は、数千冊を収容可能。「ひまわり号」の名称は小・中学生への公募により名付けられ、車体にはひまわりの絵が描かれている。

123号(昭和58年3月)  
「移動図書館車ひまわり号」

4月2日

### 防災行政無線開局

9月20日

### 9代町長に遠藤正氏就任(2期目)

昭和59年3月29日

### 老人福祉センター新設工事完成

4月1日

### 地域下水道の供給開始

11月1日

### 大熊町町制施行30周年

町制施行30周年を記念し、町の木「モミ」に加えて、新たに町の鳥「トビ」、町の花「梨」を制定した。また、役場前庭に職員がタイムカプセルを埋設した。町制施行100周年で発掘する。



町の花「梨」



町の鳥「トビ」



町の木「モミ」(※昭和48年4月1日制定)



# OKUMA HISTORY

昭和60年～現在までのあゆみ  
昭和60年代から、町制施行70周年を迎えるまでの、  
大熊町の歩みを振り返る。

## 平成5年

2月  
大熊中学校校庭整備工事完成

## 平成6年

11月  
町制施行40周年  
大熊町イメージソング発表会

## 平成7年

9月  
12代町長に志賀秀朗氏就任(3期目)

## 平成8年

11月  
緑化推進運動功労表彰総理大臣賞受賞記念式典(熊町小学校)  
ひらめ養殖施設竣工式

## 12月

大熊町図書館・民俗伝承館竣工式

平成5年～

## 昭和62年

1月  
スポーツセンター宿泊研修施設完成  
9月  
10代町長に志賀秀朗氏就任

## 昭和63年

2月  
第1回大熊町駅伝競走大会実施  
3月  
熊町小学校屋内運動場完成

昭和60年～



## 平成13年

4月  
保健センター落成式  
7月  
「おおくま希望の翼」実施(第1回)

## 平成15年

4月  
大野・熊町児童館開館式  
9月  
14代町長に志賀秀朗氏就任(5期目)

## 平成16年

11月  
町制施行50周年

## 平成17年

3月  
JA大熊町、JAふたば、JA南双葉が合併し、新「JAふたば」誕生

平成13年～

## 平成9年～

### 平成10年

4月  
複合型商工館完成

### 平成11年

7月  
総合体育館・大熊中学校第二体育館・在宅介護支援センター落成式

### 8月

「ステーションプラザおおくま」ホテル完成

### 平成11年

9月  
13代町長に志賀秀朗氏就任(4期目)

### 11月

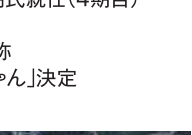
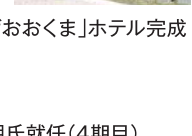
町のキャラクター愛称「おおちゃん・くうちゃん」決定

### 平成12年

4月  
クリーンセンターふたば落成式

### 11月

町役場ホームページ開設



## 平成元年～

### 平成2年

3月  
「21世紀の翼」実施(第1回)

### 平成3年

3月  
オーストラリアバースト市と姉妹都市を締結

### 9月

11代町長に志賀秀朗氏就任(2期目)  
熊川鮭ふ化場建設工事完成

### 平成4年

2月  
大熊町文化センター建設工事完成



## 平成18年～

### 平成19年

4月  
おおくまスポーツクラブ設立

### 9月

15代目町長に渡辺利綱氏就任

### 10月

大熊町公民館が優良公民館として文部科学大臣表彰を受ける

### 平成21年

### 3月

ふれあいパークおおくまオープン

### 10月

国道288号玉の湯トンネル貫通式

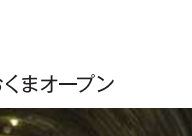
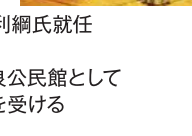
### 11月

行津橋開通式

### 平成22年

### 4月

聖徳太子神社春の大祭で20年ぶりに宝財踊りが披露される



## 平成23年

3月  
東日本大震災発生



福島第一原子力発電所事故発生  
田村市へ避難開始



### 4月

会津地方へ二次避難開始  
大熊町役場会津若松出張所を開設



### 10月

いわき連絡事務所をいわき市に開設

### 11月

16代町長に渡辺利綱氏就任(2期目)

## 平成24年

### 10月

中通り連絡事務所を二本松市に開設

### 12月

避難区域再編(避難指示解除準備区域・居住制限区域・帰還困難区域)

平成23年～

## 平成25年～

### 平成25年

4月  
大熊町立大熊中学校会津若松仮設校舎開校

### 6月

避難指示解除準備区域・居住制限区域の本格除染事業の開始

### 平成26年

### 9月

国道6号線全面通行可能に

### 11月

町制施行60周年

### 平成27年

### 3月

常磐道全線開通記念式典実施

### 11月

17代町長に渡辺利綱氏就任(3期目)

### 平成29年

### 11月

震災後、初めて大熊産農産物(ホンシメジ)が町外出荷へ

### 平成30年

### 4月

居住制限・避難指示解除準備区域で「ふるさとへの帰還に向けた準備のための宿泊(準備宿泊)」開始



## 11月

18代町長に吉田淳氏就任

## 令和2年

### 2月

大熊町2050ゼロカーボン宣言

### 3月

大野駅周辺の避難指示解除および野上・下野上地区の一部立入規制緩和(帰還困難区域)JR常磐線が全線再開、大野駅が利用再開



### 5月

帰還困難区域で営農再開に向けたコメの試験栽培開始



## 令和3年～

### 令和3年

3月  
下野上・熊地区の一部で立入規制緩和(帰還困難区域)

### 10月

町交流ゾーン(交流施設「linkる大熊」、宿泊温浴施設「ほっと大熊」、商業施設「おおくまーと」)がグランドオープン



### 12月

特定復興再生拠点区域での準備宿泊開始

### 令和4年

### 4月

町立義務教育学校「学び舎ゆめの森」開校  
町移住定住支援センター開所

### 6月

特定復興再生拠点区域の避難指示解除

### 7月

大熊インキュベーションセンター開所  
12年ぶりに町内で相馬野馬追の帰り馬行列

### 11月

「ふるさとまつり」を震災後町内で初開催

## 令和5年～

### 令和5年

### 4月

「町立学び舎ゆめの森始まりの式」を挙行  
町内に認定こども園・義務教育学校が帰還



### 5月

特定復興再生拠点で水稻の実証栽培開始

### 11月

19代町長に吉田淳氏就任(2期目)

### 令和6年

### 11月

町制施行70周年

平成31年・令和元年  
3月  
常磐自動車道「大熊インターチェンジ」供用開始



### 4月

居住制限区域(大川原地区)・避難指示解除準備区域(中屋敷地区)の避難指示解除



大熊町新庁舎開庁式



### 6月

大川原～富岡駅間で生活循環バスが運行開始



平成31年・令和元年～



## 昭和30年代

人口減少期・住民一人当たりの歳出額が県平均を下回る



大熊町役場 元職員  
渡部 正勝さん

出稼ぎが多かった。うちのおやじも相模湖あたりに行っていた。町内に就労する場所がなくて、長男のほかは中卒、高卒で集団就職。そのころ、戦争中に大熊に疎開して東京近郊に戻るといふ人達もいたな

歳出規模だけみると、町と県平均にすごく差があるかというところではない。県、東北全体が貧しかったと思います。人口も双葉郡、相双地域全般で減少傾向にあります



福島大学教育推進機構  
加藤 穂高さん

## 昭和40年代

人口反転期・住民一人当たりの歳出額が県平均を上回り始める



大熊町役場 元職員  
渡部 正勝さん

30年代後半に原発の誘致が決まって、建設のための関連企業と人が流入してきた。俺も高校卒業して1年、原発で働いた。建設会社の現地雇用。そのころ、国土調査事業が始まって、人が足りないってことで役場職員の募集があったのを勧められた。当時、建設会社の給料月2万、役場は1万8000円にならなかったな。人が増えたことで、町に活気はあったと思う

## 昭和50年代

人口急増期・住民一人当たりの歳出額が県平均を大きく上回る



大熊町役場 元職員  
渡部 正勝さん

潮目が変わったのは昭和49年頃。電源三法の成立時期

46年に原発1号機が運転開始し、減価償却のあり方なんか議論されて、町に金が入ってきた。それに伴って公共施設の整備が増えてきた。地方交付税不交付団体になったのは昭和49年度。事業も県や国の補助金を取りに行くのではなく、町のお金でやれるものはやりなさいという感じになった



福島大学教育推進機構  
加藤 穂高さん

## 昭和60年代～

人口増加安定期・住民一人当たりの歳出額が県平均を上回って安定継続



大熊町役場 元職員  
渡部 正勝さん

東日本大震災直前まで人口は増えていた。中学生まで医療費無料、公共料金も安い。歴代トップの考えとして、原子力の恩恵を住民サービスに持っていくというのがあった

人口は「大熊町史別冊」、「福島県現住人口調査」、総務省「住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数調査」を用いた。歳出額は、昭和30年度のみ大熊町史第1巻記載の予算額を引用。ほか福島県地方課「市町村財政年報」、福島県統計課「福島県統計年鑑」、総務省「地方財政状況調査(市町村別決算状況調)」の決算額を基に、物価の変動を加味した。



統計データ 解説資料

## [昭和30年～平成22年]

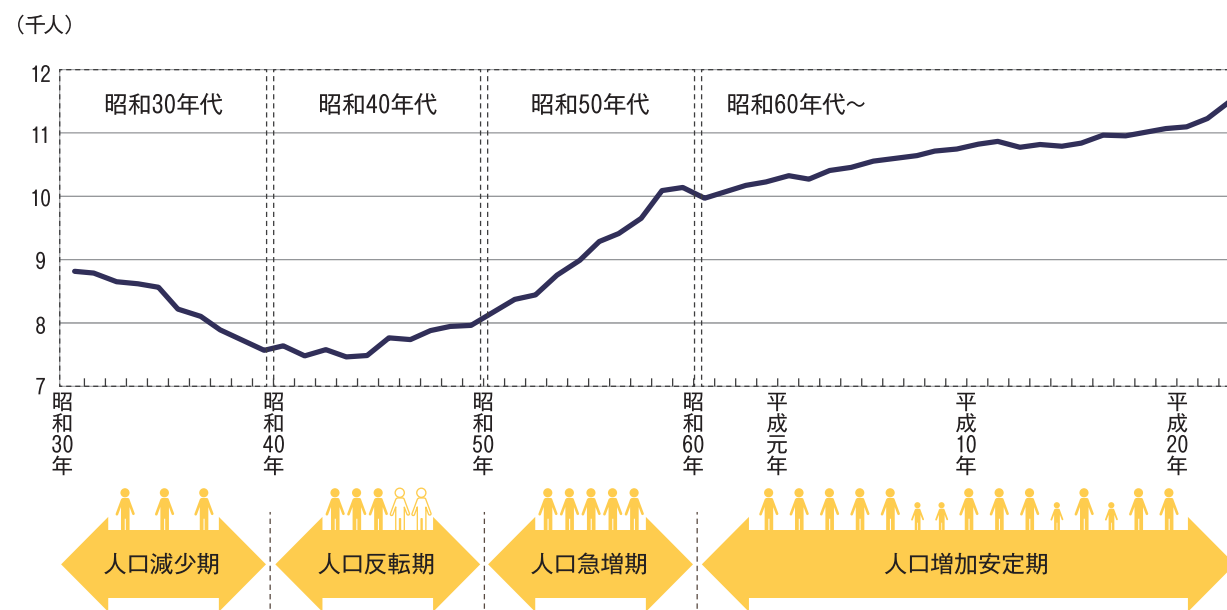
# 大熊町人口・歳出額の推移

昭和30年からの大熊町の人口と歳出額の推移を分析した結果、おおよそ10年ごとに特徴がみられた。

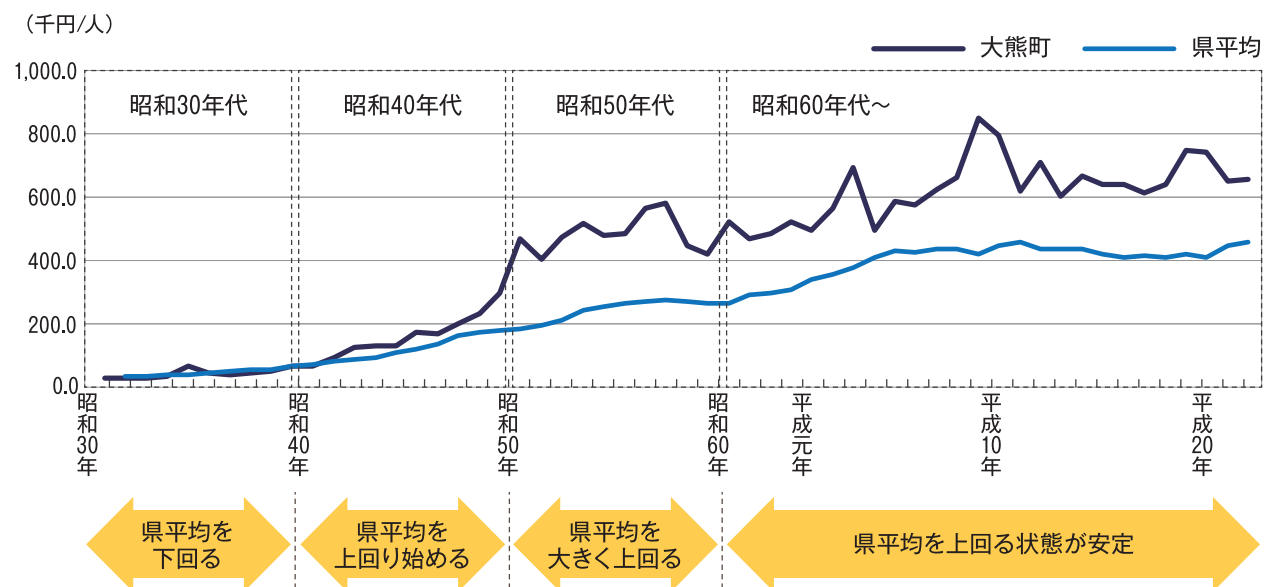
福島大学教育推進機構の加藤穂高特任講師の分析と、

大熊町役場元職員の渡部正勝さん(75歳、昭和44年入庁)の証言から各年代を振り返る。

### 大熊町の人口推移(～平成22年)



### 住民一人あたり歳出額の推移(実質値)







主な内容紹介

2面—教育行政重点施策 指定通学路  
3面—先生格介 スクールバスの運行  
4面—熊町婦人会結成 青年学級学習  
5面—スポーツ傷害保険 学級生募集  
6面—民俗資料の収集 民話  
7—8面—みんなのひろば  
発行編集 大熊町公民館  
印刷所 大熊町公民館



# 数珠くり

延命地蔵は難病をおしくれる仏として、また息災延命、蘇生力をもつ仏として長く信仰されてきた。そして延命地蔵のまつりの日を中心としたジユツクリが受けつがれてきた。地元では、お念仏とか、十三仏などというが、長さ三十二尺(約十米)のひもに千個の平たい数珠を通した数珠を法眼(ホウガン)のたたく針につれて念仏や和讃を唱えながら回し、法眼とならんですわったもう一人のお年寄が一回・二回……と数える。終ってから数珠で肩をたたくとさらに霊験があらたかたという。

熊町延命地蔵(はなどり地蔵)の数珠くり  
延命地蔵の祭りに当り3月5日(旧2月23日)  
86才の老婆を含めて部落民25人で行われた

念仏を唱えながら数珠を回す「数珠くり」。延命地蔵に願いを込める姿がある(84号)

## Chapter 01

公民館報から見る

# 大熊町のくらし

### おおちゃんARの遊び方

- 1 下部の二次元コードを読み取ります。
- 2 カメラへのアクセスが求められるので「許可」を選択します。
- 3 カメラが立ち上がるので、上部の公民館報を読み取ってください。



素敵な映像が流れるよ!



くらしの中に息づき、長い年月、連続と受け継がれてきた民俗芸能や伝統文化。人々はそこにどのような祈りや願いを込めて生きてきたのだろうか。一方、大熊町が誕生した直後の昭和30年代から、日本は高度経済成長の時代へ入り、町のくらしも大きく変化していく。原子力発電所の建設が始まると、道路をはじめ、水道、電気、電話などのインフラが整備され、町の風景も変わっていった。生活の変容とともに、家族のありようも少しずつ形を変えていく。そして、2つの村の合併は人々のくらしの中にどのように浸透していったのか。そんな町民の日々を、「合併問題」「家族・家計」「インフラ・交通」「民俗芸能」のテーマで掘り下げていく。

ちょっと息抜き

## 公民館報 町民こぼれ話

公民館報に寄せられた、町民の方々からのメッセージ(寄稿)。ほっこりするものから、身が引き締まるものまで、様々なエピソードや意見が寄せられていました。数々のエピソードの中から、いくつか抜粋してご紹介します。

### 無言の教え

大川原 一主婦

三日ばかり前 私は急に歯痛になり、医者に出かけた。待合室には七・八人の患者さんがいた。私は自分の靴だけ揃えてあげ、受け付けを済ませると間もなく、年を越えたと思われる白髪の腰のひどく曲がったおばあちゃんだった。先にいた人たちに一礼をしたかと思うと、玄関に乱雑にぬぎすててあった靴やサンダルを、次々にきちんと並べはじめた。ほとんど履物を揃えてから、自分のぞうりを揃えて上がってこられた。そして患者さんの前を礼をして奥の方に腰かけられた。私はおばあちゃんの行為をみて思った。なぜなら、私は自分の靴しか揃えなかった。乱雑だなあと感じたことは感じたのだが……。

次に来た子どもたちも、これを見てきちんと揃えて上がって来た。無言でみんなに教えているように思われた。私はじっとこのおばあちゃんをみていたら、おばあちゃんと私の目が合って、私にもっこり、おばあちゃんもそれは仏様の

ようなやさしいやさしい笑顔をされた。この歯科医院の玄関のこんな一つのことに、年老いたこのおばあちゃんのような心持ちで、みんなが生活したら、どんなにこんでいても大丈夫だと思っただ。明るい社会、秩序ある社会はこんな小さなことから始まるのだと思っ。そして、私はこのおばあちゃんの笑顔を見て、おばあちゃんの一家は、きっとあたたかい思いやりのある家庭だろうと思っ。このおばあちゃんを見て育った子どもたち、そのおばあちゃんの子どもの子どもたち、つまり孫さんたちも、きっとおばあちゃんになることだろう。

そして、このおばあちゃんに出逢ったことが、私には何か、とても尊いものをもたらしたようで、うれしくてならなかった。

(公民館報 111号掲載)



### やめろ

小五年生の坊主

父ちゃんと母ちゃんは時々けんかをします。何かあるときまって二人の意見がわかる。激しい口喧嘩、ぼくや妹にも話してくれない。どうしたどうしたときいても何でもねえとそっぽを向いてしまっ。その時針でさされるようだ。どっちがいいか、どっちが悪いか、どっちも可愛そうだと思えてくる。大声でやめろといいたくなる。だがぼくにはその勇気がない。四、五日の間、父ちゃんも母ちゃんもよんぼりする。父ちゃんも母ちゃんもよく話し合ってほしい。ぼくが泣きたくなる程心配しているんだから。誰もいないところでやめろ、やめろ、大きな声でぼくはこう云った。ぼくはとってもさびしい。

(公民館報 101号掲載)





# 公民館報から見る大熊町の暮らし 01 合併にゆれる 住民感情



「大熊町民の皆さんへ 公民館の発足に当って」(公民館報 1号)

2つの村の合併により誕生した「大熊町」。  
旧村それぞれの葛藤と、時間をかけて  
垣根が取り払われていくまでを振り返る。  
そして新たに浮かび上がった双葉町との合併騒動。  
その時、町民はどのように動いたのか。

## 厳しい財政事情

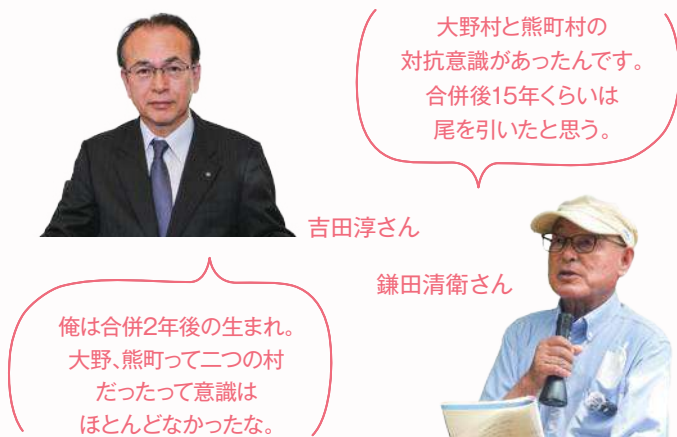
**創** 刊号には、町財務課による「大熊町を解剖する町財政について」という解説記事も掲載されている。「大熊町が発足して一年半余、一番困ったことは遺憾ながら財政問題だと答えざるを得ない」と厳しい書き出しだ。財政難の「責任が町自体にあるは勿論」と認めつつ、国の施策にも翻弄される地方自治体の苦勞もにじむ。31年度の歳入は4割以上が国からの地方交付税、約3割が町税で、「国への依存財源」のほかは「結局町の財政は税によって賄われる」と説明。合併後の公共施設の改築・建築事業などで「多額の出費」がかさみ、「町の公債は現在約一千五百万円余」。町事業完遂には町税の滞納解消が唯一かつ絶対条件として、農作物の豊作が見込まれる31年度は「町税完納の家が100%になるよう」と切実だ。

うと、婦人会を中心に32年9月発足。「税金は主人にばかりにまかして置けない」「まず完納しないうちは着物も買わない」との意気込みで、「納税完納第一位」を目指す(11号、34年3月)。

「着物も買うまい」と張り切る野上三区婦人会の場合  
私達読書会での話し合いの結果生れたのが、この納税貯蓄組合です。大熊町第一位という、有難くない税金滞納部落を納税完納第一位目指して昭和三十三年四月一日、大野、熊町農協が合併し、大熊町農業協同組合が発足(26号、37年4月)。農協合併は12号(34年6月)の時点で町や議会等から推されていたが、実現しないまま数年。もはや「北双で残っているのは大熊町だけ」となり、大野農協の石田真宗組合長は「縁組の時機到来」と呼びかけていた(25号、37年1月)。

100号(53年3月)では「大野、熊町婦人会が合併」。町誕生から20年余り。「各種の団体が相ついで合併

## 徐々に「大熊」に



大野村と熊町村の  
対抗意識があったんです。  
合併後15年くらいは  
尾を引いたと思う。

鎌田清衛さん

俺は合併2年後の生まれ。  
大野、熊町って二つの村  
だったって意識は  
ほとんどなかったな。

吉田淳さん



町制施行15周年記念に行われたイベントの様子

され、いまでは大野婦人会と熊町婦人会が残り……と紹介し、合併を祝している。「大野」と「熊町」はゆっくりと二つになつていった。

## 人の和を大切に

**大** 熊町発足から2年弱。「合併早々、つらいことばかりでむしろ合併しなかったほうがよかつたという声も聞きますが……」。創刊号(昭和31年8月発行)の小畑重町長の言葉から苦勞が伝わる。

小畑町長は合併後、中学校や役場の新築、道路の改良、果樹栽培の振興等を進めてきたが、教育施設はまだまだ改築が必要だし、町道はこれから整備していくと計画を語る。ただし、「金のことは簡単には参りません」。

さらに「先ず第一に人の和を御願ひ致します」と町長。願わくは「貧乏はしているがよく親睦のできている気持ちのそろつた町であるという信用を得たい」。そして「合併はしてよかつたと共に喜ぶ日の一日も早からんことを」と訴えた。

その町長が「町内の自治調整は終わった」と宣言したのは合併6年目(21号、36年1月発行)。これからは「開発関係で躍進すべき」と発展へ舵を切る。同号で石田真宗町議長は

「原子力の問題も本年の五月までは決定を見るやに聞く」と明かす。小畑氏から町政を引き継いだ志賀秀正町長は、町制施行15年を特集する60号(44年11月)で、合併後の「忘れることのできないこと」として3つを挙げた。「常磐線全線電化」、「大野駅急行停車」そして「町政史上一大転機をもたらした原子力発電所の誘致」だ。

「東北の手ベツトといわれ、農業以外に生きる途のなかつたこの町に、ようやく光が訪れた感」と志賀町長。「合併当初の予算規模はわずかに3000万円程度が、現在では2億5000万円を超えるほどに成長しております」。原発1号機は昭和46年3月に稼働する。



昭和45年当時の大熊町役場 上空からの写真

町制施行15周年記念 特集号(60号)掲載  
熊町村・大野村村長 合併への想い



合併時の熊町村長  
太田 耕治さん  
私は熊町、  
大野、上手岡、  
富岡の四町村

の合併が念願だったよ。道路は大野駅から、熊川、小良浜、小浜を経て富岡駅東に結ぶ線をつくるべきだと思っていたし、熊川に漁港をつくるべく努力した。

熊川の治水工事も思い切つて進めようとした。教育については、私の手で夜ノ森高校をつくり、同じ手で廃校することとなったが、この延長として、双葉農業高校舎が出来、体育館が出来、更に熊小の改築と努力がむくいられた。

私の信念は今も変りがない。今こそ、学校と公民館を思い切つて立派につくるべきだ。そのためには中学校の統合は是非必要だ。時勢の推移を見抜いて、思い切つた積極大胆な施策を進めることが現在ほど大事などきはないと考えている。











# インフラ整備で 変わりゆく 町の情景



自転車での「右折」を学ぶ町民

## 生活インフラの進化

**昭**

和44年2月、中屋敷地区36戸、町内10戸の計46戸に電気が通った(55号、昭和44年2月発刊)。

「ランブ生活というみじめな生活をしてきました」という中屋敷の持田虎之助さんが「電気導入に対する感謝」を投書している。「私達は電源町大熊でありながら、多額の費用を要するため、半ばあきらめていました」「嫁などを迎える家で、中屋敷には未だに電気がないとの理由でまともりかけた縁談も不調に終わった例はままありました」。しかし、「このような苦しい経験も電気導入で解消しました」と感謝。「このご恩に報ゆるため、私達は立派な大熊町民となって義務を果して参りたい」とまで語っている(56号、44年4月)。

44年には、町内のほぼ全域に水道による給水が行き渡った(57号、44年6月)。ただ、井戸水などの使用を続ける家庭も少なくなかったようで、町の水道課長は「現在はポンプもある、水もよいと御自慢になっ



電話自動化を記念し行われた祝賀会の様子

将来予想されるダム建設、工場誘致、開田続出、干天到来等あらゆる条件に備えて水道御利用が最も賢明な策」と水道加入を呼び掛ける(53号、43年9月)。  
交換手を介さない電話の自動化は46年1月。この時、局名が「大熊」となり「市外局番024032」が割り振られた(67号、46年1月)

## 道路網の整備

**62**

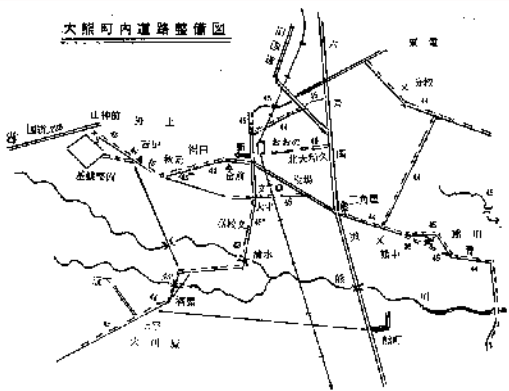
号(45年2月)に、町内の主要道路を示した地図がある。道路整備の進ちよくをまとめた記事に添えたものだ。

「上水道を引き、道路網の整備と通信網の拡充を図り、土地基盤を整備し、治水、学校建築と鋭意町開発の基礎づくりを進めてきた大熊町」。その土台である町土に張り巡らされた道

路は、新設もあるが、拡張や砂利道から舗装道への改良が目立つ。

63号(45年5月)、64号(45年7月)、67号(46年1月)には、急速に変化する町の写真特集が組まれている。各地の道路舗装工事、新たにできた耐沢橋(鉄道ご線橋)、建築が進む民間・公共施設など、町内のあちこちで植音が響いていたことが分かる。

62号の記事は、近く控えた原子力発電所稼働にも触れ、町の飛躍をこう表現した。「伸びるために、身をちぢめて力を貯えた尺取虫が、時期を得て伸びるよつに」



「大熊町内道路整備図」(公民館報62号)

## 溜池ダムの建設

**溜**

池やダムの整備も進んでいる。創刊号(31年8月)に「小塚溜池完成す」の記事。「之により野上原開墾地帯七〇町歩が黄金波打つ一帯の水田となる見込」とある。

87号(50年10月)に寄稿した「野上原の一農夫」は、それまで夜の間に自分の田に水を引いておく「夜水ひき」は年中行事で、「水けんかも珍しいことではなかった」と振り返る。しかし日照りが続いたこの年、「二晩も夜水ひきはしなかった」と、「小塚、万右工門のつつみに感謝する」。

34号(39年7月)には「町民の念願手倉ダムの建設基礎調査始まる」。手倉ダムとは坂下ダムのこと。大川原川、熊川流域の水田の水不足解消が主な目的だが、原発の冷却水としても使われることとなった。44年に着工、48年落成。

64号(45年7月)に、大川原地区の宗像勲一さんのワサビ畑の写真がある。「この沢ワサビもやがて坂下ダムの完成と共に水底に没して行く」。大



宗像さんのワサビ畑

川原地区の集落の一部は、ダム湖に沈むこととなった。

## 交通量増加

**47**

号(42年9月)の一面記事は「積極的交通事故対策 自動車の駐車禁止」。町では、道路の改良や原発建設工事の進ちよくなどを背景に、車の交通量が増加、交通事故も増加していた。

42年1〜7月の町内交通事故発生件数は33件、うち人身事故は富岡警察管内ワースト1の25件。町交通安全対策協議会と富岡警察署は、まず通学時間帯の駅前周辺で駐車を禁止、歩行者と車のスムーズな走行を助け、事故を防ぐと決めた。

しかし、84号(50年3月)に「駅前周辺の交通混雑はいつこうに解消さ

当時を知る町民のこえ

鎌田 清衛さん(82歳) 野馬形区

目まぐるしい変化でしたね、道路は。砂利道だけでも道の砂利がない。つまり土の上を直接歩く。昭和35年頃からたまにトラックとかが走るようになると、トラックが走った後、雨降ったら水たまりになる。原発ができる2、3年前までは、膝まで埋まるくらいのぬかるみが町中いっぱいでした。それをカバーするのに失業対策事業っていうのがあって、道路を埋めたり少しでも改良する形でやりましたね。そこから原発が入ることでおっきな機械が入って道路を壊して、そこに舗装道路を作るようになりました。







# 伝統の 民俗芸能に 保存と伝承の動き



野馬追に出陣した騎馬

## 民俗芸能の継承

**昭**

和43年8月、第1回大熊町民俗芸能発表会が開かれた。同年1月に発足したばかりの町無形文化財保存会(吉田義貞会長)が主催。「神楽、宝財踊り、鹿舞い踊り、念仏踊り、民俗舞踊、郷土民謡、檜太鼓」の7部門38種目が披露された。地域ごとに祭事などで営まれる民俗芸能が、日中にとめて見られる貴重な機会。この発表会で、夫沢の長者原じやんがら念仏太鼓踊りが7年ぶり、野上の諏訪神楽が12年ぶりに舞った(53号、昭和43年9月発行)。

諏訪神楽をめぐっては44年、奉納先である野上諏訪神社の改築が決まる(57号、44年6月)。神楽も新調され、復活につながっていく。さらに、地域に伝わる太鼓を継承する「正調諏訪太鼓を守る会」も結成され(100号、53年3月)、「正調諏訪太鼓継承の祭典」では懐かしさにむせび泣く人もあったという(112号、55年10月)。



民俗芸能発表会で披露された熊川稚児鹿舞(写真右)と宝財踊り(写真左)

で舞うじやんがら念仏太鼓踊り。芸能発表会後も活動が継続されていたことが分かる。

町民の暮らしの中で生まれ、長い年月をかけて受け継がれてきた民俗芸能。保存会発足を機に、復活の動きも見られる。相馬野馬追に出陣する騎馬会も発足しふるさとを盛り上げる。



町制30周年を記念し行われた、文化団体芸能発表会の様子(※武内政幸氏提供)

## 町の文化を大切に育む

**大**

野駅前前の春の恒例行事「聖徳太子祭」。43年の祭礼では、地域の野球チーム「駅前スパーク団」が「宝財踊り」に参加し、観衆を沸かせ

た(51号、43年5月)。スパーク団は、聖徳太子神社前の大野公園にも桜やつつじの苗木を植樹するなど、スポーツ以外の地域活動でも、しばしば館報に登場する(63号、45年5月)。

84号(50年3月)の表紙は、熊町延命地藏前での「数珠くり」。87号(50年10月)には、その際に唄われる「和讃」の二節が掲載されている。「つとや……」と始まり「十とや、とかく浄土に行きたくばなむあみだぶつをとのうべし」まで。同地区の磯部さんさんからの伝承だ。

祭りや行事を復活する動きもみえる。夫沢三区では、馬頭観音東堂山の夏祭りを復活しようと、建物を修理。同地区の老人クラブは境内の草刈りで協力した(86号、50年7月)。

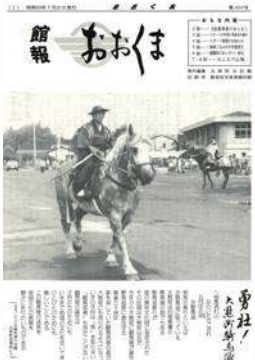
「戦後三十余年 姿を消していた騎馬武者」が町に戻ったのは53年7月。相馬野馬追が国の重要無形民俗文化財に指定されたことをきっかけに、大熊町騎馬会が結成され、8騎が参加(101号、53年7月)。凱旋した一行は数百名の町民に迎えられ、「万雷の拍手」を浴びた(102号、53年11月)。

## 歴史を伝える

**形**

のある文化財は大切にされる。形のないものは無視される。地名も文化財の一つだと思おう。92号(51年10月)で、館報の編集委員や町の教育委員長も務めた松本幸一さんは「地名に関心を持とう」と呼びかけた。

地名に限らず、館報は、祭りや行事等の紹介と別に、地域に伝わる民話を連載したり、高齢者大学の受講生が地区のなり立ちを記したりと、町の歴史を残し、伝える記事も多く掲載している。



大熊町騎馬会の結成は、公民館報表紙で大きく紹介された(公民館報101号)

## 当時を知る町民のこえ

武内政幸さん(79歳)野上2区

相馬野馬追の騎馬会が、最初に始まったのは俺らの時だ。ずっと昔は、うちの先祖と昔の野上4区って北の方の1軒で2頭だけ出場していたらしい。それを聞いてても、俺は「できねえな」って思ってたんだけど、菅野祐一って乗馬クラブやってる人と飲んでたら、野馬追を「復活させよう」って話になったわけ。そこから声かけて集まった8騎。「8人の侍」で行こうって。その時に買った兜、今も飾ってるよ。昔は田んぼはみんな馬でうなってるから、小さい頃は馬に乗ってるわけよ。競走馬とは別だけ乗馬の練習はしなかった。そこから俺は10年出たよ。



現在まで受け継がれる大熊町騎馬会の凱旋行列





武内 政幸さん(79歳)  
野上2区  
R6・2・22聞き取り

諏訪神社の神楽の始まりは、私も分かんねえんだ。青年会作った時、俺が32、33歳だから50年以上前だべな、10年くらい途絶えていたのを「伝統的なのはなくさない方がいいんじゃないか」という人がいたわけよ。それで青年会で、地区の公民館に夜集まって練習した。

覚えるわけ。神楽も見て覚えるしかない。「ダメだ」って言われたらやり直し。地区の行事だけど、それでも芸の道っていうのは簡単なものではねえな。

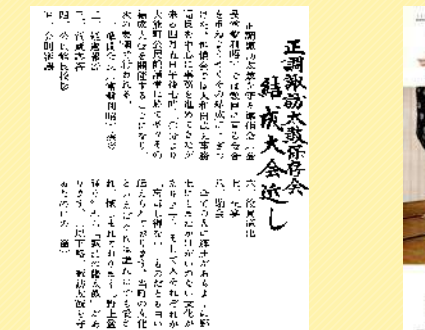
2人だ。前被りという神楽(頭)を被る人は、口で神楽の中の棒を噛んで踊るわけ。だから被る人は交代で3、4人いないとできない。手ぬぐい巻いても、歯やられちゃうから。

2人しかない。神楽も諏訪太鼓も10年くらいやったかな。仕事忙しいところで、やっぱりみんな集まらなくなっちゃったんだな。盆踊りは震災前まで続いていたけど、もう俺も太鼓は叩けないな。急にやっちゃったからねえもの。

### 当時を知る町民のこえ

われた。太陽が東から上がって西に沈むから、そういう意味だと思うんだけど。それは絶対。

人を後ろの2人が支えて、高く伸びるほど恰好いい。後ろは呑んだ刀を受け取る役目もあるから3人必要。全部やったら30分はかかる。汗だくだ。



「正調諏訪太鼓保存会結成大会近し」(公民館報100号)



諏訪神楽の復活を紹介する記事(公民館報94号)



酒井 幸子さん(93歳)  
町区  
R6・5・1聞き取り

私は熊町に生まれて、熊町で嫁いだ。「数珠回し」は、ばあちゃん(姑)の代わりでたった2回くらい行った覚えある。

葬式が出た家で行ったと思うんだけど、詳しくは分かんねえ。晩御飯食べた後、普段着で行く。部落の各家から1人、15人か20人くらい集まるんだ。男は混ざらねえ。女だけ。

隣の人に回してやる。部落の年のいったあんちゃん(お姉さん)が、念仏が分かんねえけど、何か文句を口説くだよ。ほかはみんなしゃべんねえ。

おらえの母ちゃんは逃がさなかつたから。嫁いだ後も「明日は三夜様だ。あつ、ばた餅食べる」と思うべし。その日は夕方、早速御飯みんなに食わせて、洗い物して跳ねるように実家に行った。母ちゃんが「ほら、早く食っていけ」って。うまかつたなあ。

### 当時を知る町民のこえ

拝むんだぞ」って教えられた。数珠は黒い袋に入れて、区の公民館置いてあったんだけど、放射能(原発事故)の後、公民館壊したべし。その前にずいぶんみんなまで探したけど、数珠どこ行ったか分かんねえんだって。

はなどり地蔵には毎月23日、「三夜様」ってあって、ばた餅作って、女の人が地藏さんをお参りしていた。私は行ったことねえけど、



熊町「はなどり地蔵堂」

### 生活の中の文化財

(公民館報87号掲載)

大熊町の文化財として、熊町延命地藏念仏講は既に館報84号で紹介されましたが、今回はその中で今なお部落民の心の中に息吹きを放っている念仏講和讃の一節を熊町の磯部きんさん(七〇才)におき致しました。

- 一つとや、ひとえに大事なおや神を、
- 孝行つくしてそむくなよ
- 二つとや、再びあらわれぬ今日の日を、
- ただ居て暮すも浅ましや
- 三つとや、身の上思わばかせぐべし、
- ただ居て現金わくものか
- 四つとや、よろずの事に気をつけて、
- 上をば見ないで下を見よ
- 五つとや、いつまでこの世にいるものか、
- 命は朝顔、花のつゆ
- 六つとや、むつまじし仲こそ夫婦ぞえ、
- 心を合わせ、世をわたれ
- 七つとや、なんなる悪事を身にうけて、
- 他人によき事あとうべし
- 八つとや、山ほど無理なる仰せでも、
- 他人の仰せはそむくなよ
- 九つとや、ここでの身を失わば
- 未来は前世のこうなるぞ
- 十とや、とかく浄土に行きたくばなむ
- あみだぶつをとのうべし





6月は貯蓄増強特別運動月間です  
○ボーナスなどの臨時収入はひとまず貯蓄しましょう。  
○上がる物価を貯蓄で抑えましょう。  
○貯蓄であるいは明日を築きましょう。  
○フレッシュマンは貯蓄でスタートしましょう。  
大熊町 熊 町  
福島県貯蓄推進委員会



生産えの息吹き 若葉と共に、野も山も生産えの息吹きに躍動する。世界農業の転換が叫ばれ、減反が訴えられる。ともあれ、米は国民の主食なのだ。今後の方向は国の、世界の計画生産であり、現在大切なことは土地基盤の整備であり、機械力によるコストダウンであろう。写真 5、9 鈴内地区にて

科学と技術の発展の進歩と資源と資本主義経済と社会主義経済の衝突をむかへ、いざいざの形勢による計画経済の導入を促す。  
米が私達の主食であることには異論はない、しかし無為無策に米作りに専らるる時代は過ぎ去っている。私達として現在大事なのは、今を生きるための米の生産と消費の両面から、食糧問題を考えることである。  
1. 地域特性を生かした生産地の開発。  
2. 地域特性を生かした生産地の開発。  
3. 地域特性を生かした生産地の開発。  
4. 地域特性を生かした生産地の開発。  
5. 地域特性を生かした生産地の開発。  
6. 地域特性を生かした生産地の開発。  
7. 地域特性を生かした生産地の開発。  
8. 地域特性を生かした生産地の開発。  
9. 地域特性を生かした生産地の開発。  
10. 地域特性を生かした生産地の開発。  
11. 地域特性を生かした生産地の開発。  
12. 地域特性を生かした生産地の開発。  
13. 地域特性を生かした生産地の開発。  
14. 地域特性を生かした生産地の開発。  
15. 地域特性を生かした生産地の開発。  
16. 地域特性を生かした生産地の開発。  
17. 地域特性を生かした生産地の開発。  
18. 地域特性を生かした生産地の開発。  
19. 地域特性を生かした生産地の開発。  
20. 地域特性を生かした生産地の開発。  
21. 地域特性を生かした生産地の開発。  
22. 地域特性を生かした生産地の開発。  
23. 地域特性を生かした生産地の開発。  
24. 地域特性を生かした生産地の開発。  
25. 地域特性を生かした生産地の開発。  
26. 地域特性を生かした生産地の開発。  
27. 地域特性を生かした生産地の開発。  
28. 地域特性を生かした生産地の開発。  
29. 地域特性を生かした生産地の開発。  
30. 地域特性を生かした生産地の開発。  
31. 地域特性を生かした生産地の開発。  
32. 地域特性を生かした生産地の開発。  
33. 地域特性を生かした生産地の開発。  
34. 地域特性を生かした生産地の開発。  
35. 地域特性を生かした生産地の開発。  
36. 地域特性を生かした生産地の開発。  
37. 地域特性を生かした生産地の開発。  
38. 地域特性を生かした生産地の開発。  
39. 地域特性を生かした生産地の開発。  
40. 地域特性を生かした生産地の開発。  
41. 地域特性を生かした生産地の開発。  
42. 地域特性を生かした生産地の開発。  
43. 地域特性を生かした生産地の開発。  
44. 地域特性を生かした生産地の開発。  
45. 地域特性を生かした生産地の開発。  
46. 地域特性を生かした生産地の開発。  
47. 地域特性を生かした生産地の開発。  
48. 地域特性を生かした生産地の開発。  
49. 地域特性を生かした生産地の開発。  
50. 地域特性を生かした生産地の開発。  
51. 地域特性を生かした生産地の開発。  
52. 地域特性を生かした生産地の開発。  
53. 地域特性を生かした生産地の開発。  
54. 地域特性を生かした生産地の開発。  
55. 地域特性を生かした生産地の開発。  
56. 地域特性を生かした生産地の開発。  
57. 地域特性を生かした生産地の開発。  
58. 地域特性を生かした生産地の開発。  
59. 地域特性を生かした生産地の開発。  
60. 地域特性を生かした生産地の開発。  
61. 地域特性を生かした生産地の開発。  
62. 地域特性を生かした生産地の開発。  
63. 地域特性を生かした生産地の開発。  
64. 地域特性を生かした生産地の開発。  
65. 地域特性を生かした生産地の開発。  
66. 地域特性を生かした生産地の開発。  
67. 地域特性を生かした生産地の開発。  
68. 地域特性を生かした生産地の開発。  
69. 地域特性を生かした生産地の開発。  
70. 地域特性を生かした生産地の開発。  
71. 地域特性を生かした生産地の開発。  
72. 地域特性を生かした生産地の開発。  
73. 地域特性を生かした生産地の開発。  
74. 地域特性を生かした生産地の開発。  
75. 地域特性を生かした生産地の開発。  
76. 地域特性を生かした生産地の開発。  
77. 地域特性を生かした生産地の開発。  
78. 地域特性を生かした生産地の開発。  
79. 地域特性を生かした生産地の開発。  
80. 地域特性を生かした生産地の開発。  
81. 地域特性を生かした生産地の開発。  
82. 地域特性を生かした生産地の開発。  
83. 地域特性を生かした生産地の開発。  
84. 地域特性を生かした生産地の開発。  
85. 地域特性を生かした生産地の開発。  
86. 地域特性を生かした生産地の開発。  
87. 地域特性を生かした生産地の開発。  
88. 地域特性を生かした生産地の開発。  
89. 地域特性を生かした生産地の開発。  
90. 地域特性を生かした生産地の開発。  
91. 地域特性を生かした生産地の開発。  
92. 地域特性を生かした生産地の開発。  
93. 地域特性を生かした生産地の開発。  
94. 地域特性を生かした生産地の開発。  
95. 地域特性を生かした生産地の開発。  
96. 地域特性を生かした生産地の開発。  
97. 地域特性を生かした生産地の開発。  
98. 地域特性を生かした生産地の開発。  
99. 地域特性を生かした生産地の開発。  
100. 地域特性を生かした生産地の開発。

一ツの提言

Chapter 02

公民館報から見る

大熊町のなりわい

各地で田植えが始まる季節。農業の転換期を迎え町の産業への提言がなされた(63号)

おおちゃんARの遊び方

- 1 下部の二次元コードを読み取ります。
2 カメラへのアクセスが求められるので「許可」を選択します。
3 カメラが立ち上がるので、上部の公民館報を読み取ってください。



町の基幹産業の一つである農業。とりわけ米作りはその中心となっていた。稲作の機械化は日進月歩で進み、省力化が図られていく。一方、兼業農家が増え、機械への投資、労力不足、減反と課題は絶えない。農家の副業として広まった畜産業は、農業経営を安定させる一役を担っただけでなく、県下有数の生産地へと成長した。果樹栽培も盛んに行われ、恵まれた気候風土が生産を後押しする。台風などの自然災害や消費者ニーズの変化に対応しつつ、ナシに代表される特産品を生み出した。漁業に目を転じると、原子力発電所の建設に翻弄されながらも、活路を見出そうとする漁民の姿がある。様々な試練の中、知恵と工夫、努力を重ねてきた町民の「なりわい」を紐解く。

公民館報 町民こぼれ話

ちょっと息抜き

うちの旦那さん

登久名

「このブヨ喰これ」と思わず鹿の子様に真赤になつた足を出して擦つたら「それも俺のせいだと云い度い所かな、身支度を良くして仕事にかつたら、なんにもブヨ喰いを手柄顔にしないで良い筈ではないか」とは旦那さんの言葉。妻が一人で遅い朝食後の一刻である。涼しい朝の内にと三時に起きて昨日余した豆畑を十五、六本さくり、田の水廻りがてら一背負の草刈をして汗と空腹でくたくたになり乍らもようやく冷たい水で洗顔しすがくしい夏の朝の気分を味わいつつ朝仕事の成果に満足しふと氣付いたブヨ喰いであつた。せめて義理にもいたわりの言葉の一つも出ないものかしら?と、妻に優しい言葉を掛ける事を、一番自尊心を傷つけるものと思ひ込んで居るらしい性格も二十余年の生活によつて分り切つて居る私でもあるが、矢張り情けない氣がしてムツト胸に耐える。そう云う旦那さんは、さも涼しい夏支度で菊の手入れに終日余念がなく、日課も持たず自分の趣味に

専念できる幸福な存在である。戦後婦人の地位の向上に十余年に亘る婦人学級或は講習会又はパネルデスカッションと堂々やり得る時代と変わったのに、家庭に戻りしきいをまたぐ途端よりのしかるる圧迫感とどうする事も出来ない現状である。オイ、ぼたんないぜ、この肌着の様子と来たらお前はろく縫物も出来ないんだからと、いまくしそうちに取り出して来る。妻は素足に土まみれ、今朝こそ此処の草取りを済ませてと汗だくなのに「私に三日も坐らせて縫物でもさせてみなさい。實家の親が切角お金をかけて修齊女學校に三年も通わせたんだから」と反抗する。この反抗が又妻の教育不足から来るものと解釈し妻が幾らかでも教養が向上すれば平和な家庭生活が生まれるものと教養の面には特異な協力振りを発揮する。夏期大學に何故出席しなかつたのだね、お前が一日位仕事をしたとて何程のこともあるまいしと。今日は婦人学級だと云いばあと二十分でバスの時間だから仕度を急げと云う。自転車にしようとはバス代二十円を浮かす女心をチョッピリ出せば汗をかく丈損だよ馬鹿氣た真



(公民館報1号掲載)

似だよと、それに足が汚いブラシで良く洗つてバンドは男物じゃないかみつともない、歯は磨く可しと。女は仕事にのみあくせくして優しさ身だしなみを忘れてはいけないと此時許りは充分な注意と訓辞を興えられて妻たる者大いに反省させられる。趣味を持たない人は不幸だと云う。うちの旦那さん理想ではあるが厳しい現実の社会との中間に立つて今後まだ幾年廻転の遅い車と早い車との間にはさまれた様な生活が恐らく終生続くのではあるまいか。



# 機械化の進展で 転換を迎えた 米作り



当時の田植えの様子(野上地区)

## 米作りの変せん

営

農指導員の堀川晃氏は、53号(昭和43年9月発行)「米づくり百年」で、町の稲作の変せんを紐解く。明治40年頃に馬耕による「持立鋤」が登場。その後、昭和30年頃に導入された耕運機が「田圃から牛馬の姿を消した」。刈り取りは「千束こき」が自脱、コンバインに化し、バインダーが秋空に響きを立てている姿は実にすばらしいと讃える。

稲の品種は明治〜大正時代の「愛国」から、昭和には食味の良い「農林十号」へ。その後「フジミノリ」が誕生し、町では約20haが作付けされた。昭和35年の生産者米価は150kg当り1万405円、43年には2万672円に上っている(58号、44年9月)。

農業の機械化は進む。33号(39年4月)は「どんどんふいる(増える)農業機械」として、動力脱穀機、電動カッターなど、町内の動力機械の種類と台数を36、37年度と比較。57号(44年6月)では、手押し式の田植機を12万円で購入した町民が「女でも出来て、人



バインダーで稲刈りをする町民

手不足の心配がない」と語る。同号には、視察で訪れた茨城県東海村で原動力施設の誘致後、休耕地が目立つようになったという話に対し、「しかしながら現実には、憂慮に反して年々耕地は増大」と町の現状を説明する記事もある。

77号(48年12月)「稲作については、農業研究会が「一反十俵の目標に達成した」と報告。会員の多くは「女子」という。「農業は副業化し、水田耕作は老人と女の仕事になっていくが、これらの人たちが、かつては夢であった反十俵の壁を破って更にその上の目標にせまっている」。稲作は時代ごとに形を変えながら、町の基幹産業であり続けた。

町の基幹作物であり続けたコメは、機械化の進展や兼業化、さらに減反などにより時代ごとに形を変えながらその歩みを続けてきた。

## 共同作業、共同炊事

**熊** 川古館地区では、43年5月の田植えを地区住民の共同作業で実施した(51号)。さらに、町で初めて田植え期間中の「共同炊事」に挑戦。「深刻な労力不足とぼう大な田植食費の無駄を省こうという考え」で、松本清之進さんのタバコ乾燥室を会場に「朝、昼、小昼」の3食と酒は毎食コップ1杯が用意された。

炊事担当の松永ヨシ子さんは、それまで2〜3万円かかっていた田植え時の飲食費が「五千円前後であった」と予測。炊事の会場には、池田徳治助役、吉田農夫雄公民館長なども駆けつけ、注目の高さが伺える。



昭和44年当時の共同炊事の様子

## 減反

**62** 号45年2月には「減反」の文字。県が大熊町の米の減産目標を256t、減反目標を62haに決めたとある。館報ではこの後、減反に対する農家の不安や、減反地の利用策などの記事が散見されるようになる。

「約1haの休耕田の中に私の10アールがポツンと作られている」。64号(45年7月)では「六十才の農民」が、稲ではなく草が青々と繁る減反地を眺め、「来年耕作するとすればどんなに骨が折れるだろうか」と懸念する。

46年3月、69号の「農工一体化の方向を求めて」は、「米の生産調整による町内の減反は三九万坪余に達し、農家の兼業率は八五%を上回る。文字通りの農業転換期にさしかかって来た観がある」とする。同月、原発1号機が営業運転を開始した。記事の筆者は語りかける。「この地方に米作りが始まり米作を中心とした開発が始まってから約一九七〇年。歴史はじまって以来の転換という課題を前にして町民一人一人が冷徹な気持と、

前向きな姿勢に立って検討することが大切だと思う」

## 農工一体化の 方向を求めて

米の生産調整による町内の「米の生産調整による町内の」として、科学技術の高度化による減反は三九万坪余に達し、農かしての工業立国以外にない家の兼業率は八五%を上回る。なつし、農業もまた自給自文字通りの農業転換期にさしかかっている。足るを以てて農業として自かかっ来た風がある。記事は、町民の不安や、減反地の利用策などの記事が散見されるようになる。

「農工一体化の方向を求めて」(公民館報 69号)

## 当時を知る町民のこえ

吉田 淳さん(68歳) 熊3区

建物が解体されても土地は残る。震災前の農業はコメが中心で、あちこちに残る水田を使っていくのは必要だべなと思うんだよ。高速道路を通る時、水田が広がる稲葉の町並みを見ると「いいな」と思ふ。コメじゃなくても構わない。土地に人の手が入って、その時期になれば、雑草じゃなく作物が実る風景に戻したい。

## 落穂拾い

一老農

稲作は機械化され、落ち穂拾いはもはや過去のものとなってしまった。しかし私宅ではまだ大型機械を使用していないのでタンポには多くの穂が落ちていた。

私は折をみてはそれを拾い集めていたが、家人はそんなことするなという。しかし折角つくったお米をそのまま捨ててしまうのは勿体ないと思つて集めて精米したら二斗余りになった。家族はおいしいといつて喜んだ。モチ米もまじっているのうまいはずだ。

私はミレーの絵が好きだ。その中でも「落ち穂拾い」がいい。あの絵の意味するものは体験なくしては理解できない。

私は毎年落ち穂拾いをつづげたいと思つている。

(公民館報 99号掲載)

公民館報  
町民こぼれ話



# 農家の働き方改革 理想と現実



公民館報15号に並び、農家の働き方についての見出し

## 農家だって休みたい

**会** 社員のように決まった休みの日がない農家。大和久地区の青年たちを中心に、「農家の休日制」導入を働きかけている(15号、昭和35年1月発行)。同地区の佐藤修さん、堀川浩さんは、まずは地区内で月2回の休日を定着させ「ゆくゆくは町を挙げての休日制実施」を目指す。ちなみに12号(34年6月)に記載の「農家の休日」は6月10日の「節句」から9月2日の「みそか盆」まで計11日。

さらに、農家の兼業化が進む中、農家の休日を商業者の休日と合わせてほしいという意見もある。47号によると、「商店街の休業日」は第1、3日曜だが、「ほとんどの店があいているので私のところだけあけないわけにはいかない」と、前出の農家と似たような嘆きがみられる。

会社勤めの農家の嫁は、農休日は出勤で休めず、会社が休みの日曜は農作業。「たまには日曜日に家族そろって休みたい」と訴える(67号、46年1月)。

農家の休日制や給料制に関する記事からは、農業の合理化や計画性への気運が盛り上がってきた様子が伺える。自立した農業経営と豊かな暮らしに向けた人々の思いとは？

## 農作業はいくらになる

**田** 植えは午前5時〜午後6時、3食付で9000円、畦ぬりは実働8時間で2食付9000円——。

45号(42年5月)に昭和42年度の農作業標準労働賃金表が掲載されている。「大熊町労働力調整協議会」が同年4月に決定したもので、賃金のほか、「労働力提供団体」として、「双農高校二日限、双葉病院、若干、商工会婦人部、若干」を紹介。毎年、賃金は「若干の水増しをするのが例であったが、今年はその前例をやめて、是非この表によって支払っていただきたい」と呼びかける。

44号(42年3月)では、専業農家の1日あたり(8時間)の手取り金を比較する。会社員との兼業農家には大きく劣るが、自営の商売をしながらの兼業農家とはほぼ同額。他の職業に就くより専業農家が高い場合もあり、「農外に働きに出る場合の警告と考えるでしょう」と兼業による農業離れをけん制する。

## 当時を知る町民のこえ

酒井 幸子さん(93歳) 町区

農家の嫁は午前4時半ごろ起きて、一番に掃除、洗濯、そして食べる準備。ご飯炊くのはまず薪で炊いていたのが、そのうち糠釜になった。そして、ガス釜になった今は電気だ。段々楽になった。

「飯炊いたら必ず(農耕用の)牛に食わせる草かっしやく。畑が6反もあったから、寄せ刈んなきゃならない。秋になると田んぼの寄せに草なくなるわな。その時には山で「ミノギ」っていう草刈ってくるんだ。山で刈るときが一番嫌だった。蛇いたらおっかねえから。なるべくおれのじいちゃんに刈らせて、自分はそのをまるめてた。だって蛇、おっかねえもの。

今みたいに耕運機もねえ時代、代掻きはまんが(馬)を馬が引く張る。じきに馬から牛に代わったけれど、馬の鼻先に長い棒をつけて操るのは女の人。まんがを操るのは男の人。同じとこばかり歩かせれば、田んぼは(その部分が)低

ただ、休日制は簡単には定着しなかったようだ。47号(42年9月)に「農業委員会」で毎月1日と15日を農休日と決定したとあるものの、57号(44年6月)には、「守っている家が何軒あることだろう」と嘆く声が寄せられている。「私も農家のはしくれであるが休んでいない一人である」とし、「一日になっても十五日になっても忘れてる。忘れないときは忘れたふりをしてる。家族もまた何ともいわない。周囲がそうだからあきらめているのだろう。」



当時の農作業の様子



はなどり地蔵



熊町の、はなどり地蔵堂

久麻川民話集  
はなどり地蔵  
熊町の地は、早くから開墾されたので、奈良朝の御代に設けられて熊川復、あるいは陸前長海道を道として、熊川と評はれてきました。



上記二次元コードを読み取ると久麻川民話集「はなどり地蔵」の全文を読むことができます  
(公民館報 53号 3ページ目に掲載)



# 果樹栽培に適した風土 特産品となったナシ



昭和43年の共同選果場の様子

大熊町のナシは町を代表する特産品のひとつ。  
果樹栽培の気候風土に恵まれた一方で  
その長い道のりには、  
先人たちの苦勞の足跡が残っている。

## 果樹天国の現出近し

**果** 樹作りは趣味が深く利益があつて割合に農業としては安定して居て作業は楽しく一家族揃つて老若男女それぞれに相応の仕事があつて……と、そのメリットを次々に挙げる、大熊町果樹研究会の太田生さん(1号、昭和31年8月発刊)。当地の地理や気象が果樹栽培に向くことは、「岩垣博士の検定によって証明済」として、大熊は一大特産地に発展すると説く。

2号(31年11月)では、同研究会長の太田稲尾さんが植付けや育て方などを具体的に指南。ナシは「八雲、長十郎、二十世紀」が県の推奨品種、モモは「布目、倉方、白鳳、高倉、新玉、高陽」、リンゴは「旭スター、ゴール」を勧めている。  
9号(33年5月)は研究会の発足5周年を伝える。会員は70人、対象果樹畑は1000町歩。土をよく耕し、肥料や牧草で草を生やして土壌を改良し、排水灌水を怠らず、合理的な剪定を心がけた上、病害虫防除にも注意を払えば「千貫目標はさして難事でも

## 果樹の栽培について

◇果樹天国の現出近し

果樹研究会員 太田生

果樹作りは趣味が深く利益が、稲作の非公開という事もなくあつて割合に農業としては安定して居て作業は楽しく一家族揃つて老若男女それぞれに相応の仕事があつて……と、そのメリットを次々に挙げる、大熊町果樹研究会の太田生さん(1号、昭和31年8月発刊)。当地の地理や気象が果樹栽培に向くことは、「岩垣博士の検定によって証明済」として、大熊は一大特産地に発展すると説く。

「果樹の栽培について 果樹天国の現出近し」(公民館報 1号)

太田稲尾さんは元宮内庁職員で、戦後、「自分もナシを作る」と私のところに来て、剪定や植え方なんかいろいろ話していた。立派な人にお付き合い願って、私は鼻高々だった。稲尾さんの息子さんは県の農業普及員になり、いろいろ世話になりました。

関本好一さん



## 果樹選果場の建築と 果樹団地の造成

**大** 野梨はどここの市場に出しても劣らないまでに進出した」と話すのは、大野果樹農業協同組合の組合員某氏(13号、34年7月)。同協会は102坪の集荷場建築を決定。昭和34年8月完成を目指し「全国」に大野梨の名声を昂める心算」と力を込める。

ただ、順調に生育した年ばかりではなかった。35年は生育時の「高温過乾」、収穫時の「異常冷涼」に悩まされるなどして不調。町果樹研究会で反省大会を開いて、課題を来年に活かそうとしている(21号、36年1月)。

40年3月には、熊町果樹組合に続き、大野果樹組合が町農協に統合し、大熊町果樹組合としての体制が整った(38号、40年10月)。この年は、異常気象や台風の心配を乗り越え、結果は上々。46号(42年7月)では、「浜通り唯一の県指定果樹基幹産地育成開発事業」として発足した果樹団地の概略を紹介。総経費は2168万円。事業1年目の実績として4haが造成された。

一方、大平地区には、谷津田義重さんらを中心に、10町歩のモモの生産団地ができた。苗木は順調に成長し、「美味しいもが多量に出荷される運びになっております」と報告している(29号、38年2月)。



モモの生産団地(大平地区)

## 若者たちの挑戦

**53** 年、自立專業の道を目指してナシ作りに励む若者たちがいた。門馬正義さん、小野寺六郎さ



鈴内梨園団地

ん、仲野孝男さん、古山一男さん、永井正文さん、熊谷義雄さん、前田克己さん、鎌田修平さんで、うち5人が20代、30代。町事業で鈴内地区に整備された10haの畑で栽培を開始した(101号、53年7月)。  
116号(56年7月)では「あれから五年」として鈴内梨園団地での栽培を振り返り、「当時は盆栽松しか育たない岩盤、ユナ地で、一本の草も生えることすらできず、雨が降れば表土は流れ、園内は水が湧き、消毒も思うようにできない状態」などと、苦勞の様子を伝えている。

## 自然災害や時代の波を 乗り越えて

**56** 年8月の台風は、町のナシ生産に「歴史上かつてない被害」をもたらした。專業農家の鎌田清衛さんによると、「県下一の幸水産地も幸水60%、長十郎30%前後豊水にいたつては80%、90%の落果」。葉は枯れ、来年の花芽不良は必至と嘆く。前年の冷夏に続く被害。鎌田さんは「百姓の来年」という言葉もあるが、来年こそはと頑張る気持ちで、数少ない良果を選果場に運んでいる。(117号、56年10月)

「我家の梨の樹」への愛着を語るのは、関本好一さん。祖父が植えたナシの古木を5本ほど残し、大事に手入れする。樹齢80年となつても毎年「見事な実をつける樹に」「梨樹も大切に(健全に)育ててやれば、長く働き続けるものだ」と自身もさらに励むことを誓つ。(124号、58年7月)  
自らのナシ作りを振り返り、朝田政好さんは話す。「戦後私達が製作りを始めた頃は物資の不足時代で、作ればどんなものでも売れた時代







# 養蚕、タバコが順調 トマト、ナメコは 共同栽培



当時の農作業の様子

## 養蚕とタバコ

### 創

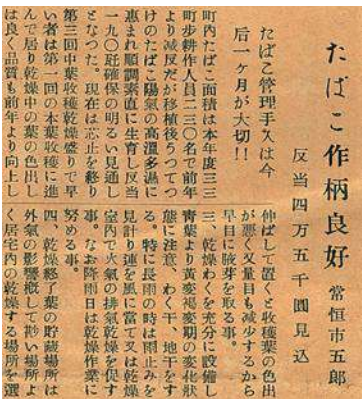
刊号(昭和31年8月発刊)の第2面は、町の農業特集。果樹、稲作に加えて、ここで傾向が分析されているのが、養蚕とタバコだ。

大熊町駐在技師の吉田八百治さんは、昭和29年度以降の養蚕の収穫量を比較し、31年度は「町の総収入金は1500万円となる訳であり農家ばかりでなく町の経済に大きく影響する」と予測する。

47号(42年9月)は、「養蚕の現況と対策」として、絹の国内需要が高まり、かつては「輸出産業」だった養蚕が「輸入しなければ追いつかぬという大異変」と伝える。養蚕戸数は37年200戸から41年には146戸へ(47号)、42年度には137戸(49号、43年1月)と年々減るものの、集約化で収穫高は上昇。77号(48年、12月)では、戦後、夫沢で桑園を開いた神場乙平さんが養蚕経営(大規模経営)の模範者として農林大臣賞を受けた。福島県において生産率第一位、総収量では三六三ニキログラムで第四位」と紹介する。



「養蚕の現況と対策」(公民館報 47号)



「たばこ作柄良好」(公民館報 1号)

一方のタバコ。創刊号の見出しは「たばこ作柄良好 反当四万五千円見込」。31年度は耕作面積33町歩、耕作人員230人、収納総代金は1500万円程度の見込みという。41年度の平均反当9万5000円は、富岡管内の平坦部で1位の成績で「昨年に引き続き優勝旗を獲得」(45号、42年5月)。共同育苗施設ができ、耕作者は279人、面積は63町5反歩に拡大している。

稲作、果樹のほかにも

養蚕、タバコ、トマト、ナメコ、シイタケなど

様々な取り組みを館報の記事に見ることができる。

そこには、農業経営の安定を目指して

チャレンジする町民の姿があった。

### 当時を知る町民のこゝろ

猪狩松一さん(77歳) 熊川区

タバコは2月に種まいて、春に苗を畑に植える。お盆までに収穫だから夏の仕事。収穫は葉を取る。これが大変なんだ。葉っぱは粘るしな。取ったら「タバコ通し」。縄に葉を通して天日干し。茎が干し上がって、かしゃかしゃになるまでやる。雨はだめ。子どもの頃、海で遊んでいる最中に雷様(らいさま)になると、おふくろが「上がってこーい」って呼ぶわけだ。「タバコおっこまなきやないから」って。あれが一番いやだったな。粗末に扱ってかしゃかしゃだから葉っぱ落ちるべ。だから「静かに」なんて言われてた。それから「タバコのし」って、干して縮まった葉を一枚一枚伸ばす。葉は室内に入れて少ししっとりしてる。タバコにも土葉・中葉・本葉・天葉ってあったけど、そういうのを種類に分けて出荷する。タバコは反収はいいんだけど、労力がかかわるわけよ。

### トマトとその他

### 今

百姓の作るもので一応値段を保證され、売るに困らないものは主食、煙草位か。それに養蚕が比較的安全しているわけだが、何れにしても大して儲かる仕事ではない。家族9人の生活費に「頭を痛め」トマトを作る志賀清松さん(1号)。「毎日値段の下がって行くトマトをもぎながら貧と銭を両脚とする百姓生活」は楽ではなさそう。

37号(40年8月)では、下野上1区がトマトの契約販売に乗り出している。販路は原町市の「キッコ―食品」で最低1kgあたり11円。41年には1kgあたり最低13.5円に値上がり(42号、41年12月)、48号(42年11月)では平均反収10万8800円で「漸く自信が付き安定」と、農協が新規栽培を促している。

このほか、カリフラワーやセロリなどの西洋野菜の栽培促進(21号、36年1月ほか)や、茨城県から夫沢2区に移住した松沢末男さんのスイカ栽培(ビル麦の試作(28号、37年10月)、

ワサビの特産化(号外、53年10月ほか)など、様々な野菜の作付けに取り組む農家の姿が浮かぶ。

父がトマト作っていて、私もトマトでいっぱいになった箱をたんがえたりなんかしてたな。でも、割に合わなかったのか、1年くらいでやめちゃったな。



愛場誠さん

### シイタケ・ナメコ

### 48

号(42年11月)で、編集委員の菅野ミヨさんは、ナメコの生産地として産声を上げた中屋敷地区を訪問。2年目の41年、順調に見えた生産は「不慮の『大旱ばつ』に見舞われ悲惨な結果に終わった」。しかし、「戦後二十余年につちかわれた開拓魂は決して弱音をはかず」、3年目の生育は見るどころ好調だ。

朝6時から、菅野忠道組合長を筆頭に収穫し、「毎日平均70〜80キロ」を採取。ふるいにかげられた最高級品

は1kg当たり「五百円〜八百円」とのこと、とても都会でなければ消化できない価格と品質にも感服する。町内では、公民館活動の若妻学級でもナメコ、ヒラタケのオガ屑栽培を学習。熊川地区ではクラブ活動を拡大し、町内組織と連携した共同栽培を開始している(50号、43年3月)。50号では、「勤務のほか稲作、鶏もやっている」という下野上地区の兼業農家、松本直衛さんが、副業としてのシイタケ栽培を勧める。大川原では、横川美保子さんが稲作にシイタケ栽培を加えた農業経営に着手(109号、55年3月)。町の事業指定を受けて地域の共同栽培で、初年度には3.5haの原木山を購入した。稲作との両立もでき、共同作業による「ゆとりある農業」に可能性を見出している。



熊川若妻学級「ナメコグループ」の集合写真



# 畜産と酪農 発展への道のり



肉用牛繁殖センターの牛たち

農家の副業として広がった大熊町の畜産と酪農。町の主要産業になるまでには、それぞれに苦労や挫折があった。

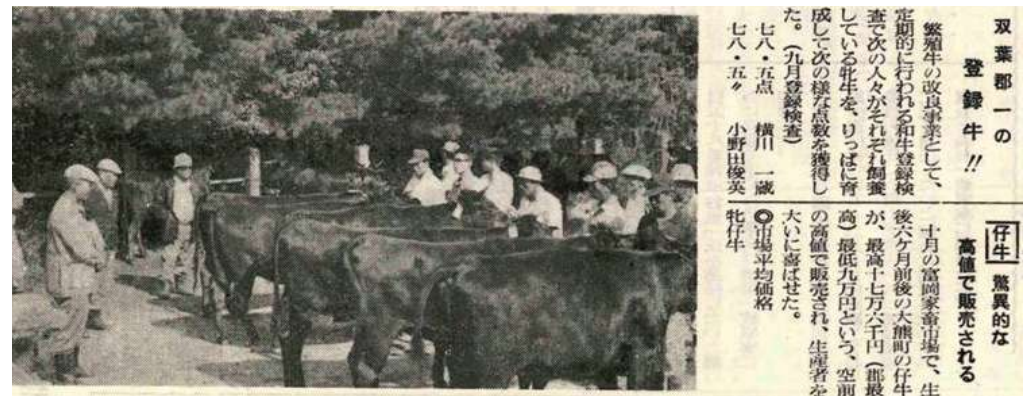
## 県下有数の生産地へ

**昔** から凶作の年には良く牛が動くと言われたものです。これは金に困って牛を手放す人、凶作に発奮して牛を飼って営農計画を立てる人、私は昭和二十八年に冷害資金五万円を借入れて牛を買ったのが「牛飼いの始まりです」。

116号(昭和56年7月発行)掲載の畜産農家の声だ。昭和37年1月14日、「大熊町和牛研究会」が結成された(25号)。同年4月、発足した大熊町農協の重点事業にも「畜産の振興」として、乳牛、和牛、豚の多頭飼育推進が掲げられている(26号)。

研究会の狙いは現金収入の増加による農家経営の安定。農耕馬が牛に代わり、さらに耕運機など機械が導入されようという時代。畜産は、農家の副業として広まった。

その後、「県下でも有数の生産地」といつても過言ではあるまい(42号、41年12月)。「双葉郡一の登録牛!!」「仔牛驚異的な高値で販売される(48号、42年11月)。「大熊に追いつけ」「追い越せ」を合言葉に……(116号、56



48号 和牛繁殖を紹介する記事

年7月)と大熊の和牛肥育・繁殖に関する記事には輝かしい言葉が並ぶ。43年3月には、夫沢に肉用牛繁殖センターが完成するなど行政も後押

し(50号)。「まいた種子は芽生え、生まれた仔牛は育ち、やがて乳となり、肉となって吾々の生活を潤す!」と堀川晃・農協畜産部長はさらなる振興に力を込める(56号、44年4月)。冒頭の農家は語る。「昨年の冷害には、米の収入が平年作の五分の一でしたが、仔牛七頭売って米の五倍の収入があり、生活にも困らず、(中略)牛を飼ってよかったですと感謝しています」。

57号(44年6月)には、愛場会長の妻久子さん(44年6月)が体験報告を寄せている。16年に副業として乳牛を買い入れたが、日に3〜4回の搾乳で肩こり、寝不足がひどく、「酪農どころか『ら』の抜けた苦農」。それから工夫を重ねて牛を増やし、長男も稼業に熱心。「よそに働きに出る心配もなく、雨が降ろうが風が吹こうが、牛は手入れ次第で充分働いてくれます」と現状に感謝する。

町内飼養頭数は▽黒毛和種(和牛)約800頭▽乳牛約300頭▽豚約300頭▽鶏約1万5000羽(29号、38年2月)。ただ養鶏は、生産過剰、飼料代高騰、消費の鈍化で卵価は上がらず、町内各地区で作る養鶏組合は減少(37号、40年8月)。養豚は、55号で木幡キサさんが、豚舎の設備から販売方法まで「副業繁殖豚経営」を指南。100号(53年3月)で、専業養豚農家の竹花和男さんは、苦労を振り返りつつ「小さいながらも二年程前に住宅を新築し、金もなければ、借金もない現在です」と語っている。

二十二年の和牛人間なら百余才! 堀川 下野上の松本幸一さんの飼われていた和牛「ふくまつ号」が二十二年の長寿を全うしてこの度川井畜産の手で極楽浄土にいった。この和牛は昭和二十二年十一月二日松本さん宅で生れた名牛で数多くの子牛(十二頭までは記憶がある)を生み、大熊町和牛発展の先覚牛として活躍していたが、ここ数年繁殖を切りあげ、かわいがられながら余生を送っていたが最近ちょっとした外傷を受けたのを機会に食肉資源として最後の御奉公をすることになった。松本さん夫妻は人も知る動物愛護家で、戦後真先に和牛多頭飼育を農業経営に取り入れた指導者でもあり、当地方が今日福島県一の肉用牛生産地となった隠れた功労者である。(公民館報 84号掲載)

**愛** 場仁・大熊町酪農振興会長は嘆いている。「水稻に基盤整備、果樹に基幹団地、和牛に繁殖センター、煙草に育苗施設、養蚕に共同施設」と町が進める事業を列挙し「しかし唯独り酪農においては?」とつぶやく(55号、44年2月)。

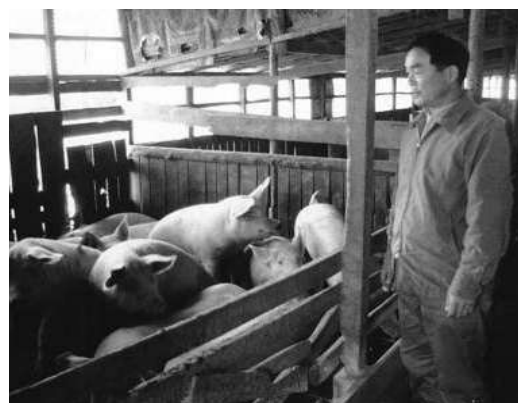
愛場会長は同号で「大熊町酪農の由来と現況」を解説。第二次世界大戦中、大野村青年学校長が酪農に将来性を見出したことから始まり、戦後の混乱期に経営基盤づくりに取り組んだ酪農者の苦労を説く。44年の町内酪農家は70戸。



昭和54年当時の酪農経営の様子

## 養豚・養鶏 その他畜産のリアル

37 年12月に開催された町の「第1回畜産共進会」の記録で、



100号でインタビューに答える竹花さん





小林一男さん(87歳)  
野上2区  
R6・2・2聞き取り

野上で4代続いた農家です。もとはコメ中心で、それでは食っていけないから、建設会社とか仕事に出たお金で1頭ずつ牛を増やしていったんです。ひとときり23頭いたんだけども。  
うちは繁殖専門でね。人工授精して仔牛が産まれたら、10か月で300kgにして出荷する。年に15頭くらい、1頭40万円あたりで売れたかな。  
畜産は容易ではないよ。生き物

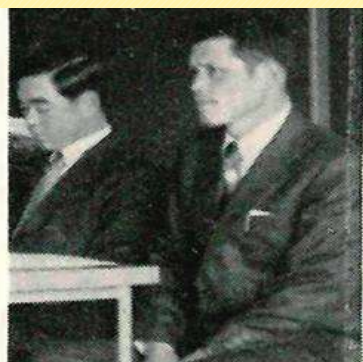
だから、自分の思い通りにならないもの。だから、思う結果になるように、自分が努力しなければもうダメだ。管理が大事なんです。お金をかけていい素牛(親になる雌牛)を買っても、子どもを1頭も生まない元は取れない。普通の手入れでは牛は1年に1産もなかなか難しいからね。  
お産で何頭か殺したときあるんです。親を、これはとてもがっかりしてどうにもならない。だから、

### 当時を知る町民のこえ



和牛の世話をする当時の町民

をやめることは考えなかったよ。年取って何年生きられるか分からないけども、楽しんでいられるようにしたいと思ってやっていたわけですよ。食べるものを作っているというのは安心なんだ。  
原発事故でこんなになっても、牛と畑でまともに働いたから、今も不自由なく暮らせている。おれ、そういう風に思っているから牛、やってよかったですよ。



肉用牛経営で  
小林一男君 優良賞  
去る三月七日北海道旭川市で全国肉用牛協会主催の経営コンクール(第四回農業祭参加)が行われた。福島県代表として発表された小林一男君(野上)は見事優良賞を獲得された。  
小林君は畜産、米作、養蚕の多角経営を行っている。

小林さん(写真右)の肉用牛経営は全国のコンクールで優良賞を獲得した。(公民館報 84号)



愛場 誠さん(75歳)  
下野上1区  
R6・1・24聞き取り

親の時は田んぼが主で、畑や牛、養鶏もしていました。収入が少しでもあった方がいいから「一つの農作物よりも二つ」という気持ちだったんでねえかな。  
18歳の時、「酪農でやっていきたい」って1年間、北海道に研修に行きました。その時、うちには乳牛2頭しかいなかった。戻って、まず牛舎を作って機械を入れて、少しずつ牛を増やしました。飼料も買えば高いから、水田に土入れて、石を拾って牧草畑にした。米は買って食べていましたね。  
毎朝5時ごろに起きて、まずサイロという保存場所から餌を出

して、餌やり。トウモロコシなどを発酵させたものを牛は喜んで食べます。母体ごとに量を代えてあげるので、管理は大変です。牛が食べている間に乳しぼり。フンを堆肥舎に出して、汚れた麦わらをきれいなものに代えたら、人間の朝ごはんを食べます。  
その後は牧草の畑仕事。昼食後にちよつと横になったら、また畑へ出る。牛は朝10時から夕方4時過ぎまで、運動場に出てストレス

にも一目置かれた気がします。「オレも一人前になったな」って思ったね。40代で作業中に機械に右腕を巻き込まれて、利き手をなくした時は「なんでこんな苦労しなきゃなんねえだべ」と思いました。その後、牛が最も増えた時期に脳内出血をして引退。牛はすべて売りました。東日本大震災の10年くらい前のことです。苦労もありましたが、酪農やったからこそ、子どもら育てられたと思ってます。

### 当時を知る町民のこえ



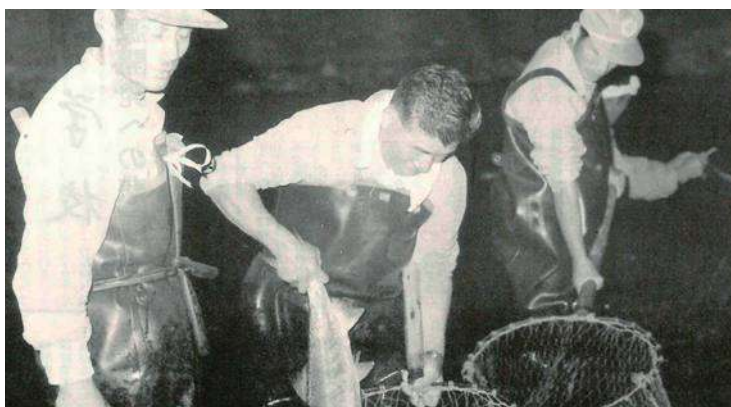
当時の苦労を振り返る、誠さんと妻・せつ子さん

酪農家は斯く嘆く  
近年大熊の農政は時代に鑑み、水稲に基盤整備、果樹に基幹団地、和牛に繁殖センター、煙草に育苗施設、養蚕に共同施設と苦しい腹を痛め乍らも指導と援助を惜しまないその姿は誠に喜ばしい。而し唯独り酪農に於ては?  
同じ町内の同志として酪農家だけが親不幸をしているわけではない「と」……  
大熊町の農業振興計画の中に取上げなくても、現存するこうした酪農の姿をみているのかいれないのか、それとも政治力が足りないのかと交々嘆くのも無理ではあるまい。  
大熊町酪農振興会長愛場仁

酪農への振興策の少なさを嘆く愛場仁さんの記事(公民館報 55号)



# 漁民悲願の 漁港建設 伝統の熊川鮭漁



熊川漁業協同組合員の鮭漁の様子

## 熊川の鮭

喜一憂の鮭漁は夜行われる。

昭和50年10月21日、暗闇の熊川で、熊川漁業協同組合員がサケの尾をつかんでいる(87号、昭和50年10月発行)。漁協では、捕ったサケから毎年100万粒の卵を採取し、孵化させて翌4月に稚魚を放流するという。

熊川のサケを守り、育てる事業は、34年段階で始まっている。11号(34年3月)で、漁協の半谷重一組合長は、「鮭は稲の穂が黄金色に実り、刈入れが始まる頃、海から河川にのぼってきて……」と、サケの一生に思いを馳せる。その上で、「卵を産ませないで食べて終っては、年々減るばかりです」と、組合でない人たちによる捕獲を憂う。33年は約50万粒を採卵した。「可愛いさけの小供が立派な親さけとなって、遠い広大な海洋生活から再び地元清流に戻って来る様に祈ろう」と呼びかける。

ただ、その後も数は減っていったようだ。42号(41年12月)によると、採



小さな銀鱗はおどる

熊川の鮭稚魚放流

3月13日

鮭稚魚の放流を伝える記事(公民館報 50号)

## 漁民の願い

45号(42年5月)に「動き出すか熊川漁港問題」の見出し。「熊川の入口に漁港を造り漁業を盛んにしたい」というのは、20年来の漁業従事者の念願だったらしい。

しかし、熊川を含め、町の沿岸に港の適地は少なく、整備には巨額の金が必要。そのうち船が減少し、漁獲高も減り、漁師も半減。沿岸漁業で生業を繋いでいたところに、原子力発電所の計画ができて沿岸漁業権を手放すことに。それならばと「遠洋漁業に活路」を求めた富熊漁業協同組合。漁港建設を求め、東電から得た賠償金のうち1000万円を大熊町に寄付している。

ただ、42年の12月町議会では、漁港建設について、町長は費用対効果に疑問を示しつつ、「先にやらなければならぬ仕事は山積している」と慎重答弁。進ちょくは伺えない(49号、43年1月)

それから2年あまり。45年6月の町議会で漁港建設が議決される(64



昭和45年当時の熊川河口

号、45年7月)。さらに、9月定例町議会の補正予算で熊川漁港の設計費用を計上(65号、45年10月)。そこから館報の熊川漁港に関する話題は途絶える。

46年11月発行「広報おおくま」6号をみると、9月町議会の一般質問に對する答弁で町は「190万円をかけて設計したが熊川漁港建設は4億円かかる」と、着工も寄付金の返還もひとまず保留。その後、町に漁港はできていない。

## 内水養魚の取り組み

下野上の清水橋近くでニジマス

の養殖に取り組むのは富岡町の三瓶さん。「清水が豊富、水温が常に一定、水質が良い、運搬に便利」と条件がそろった下野上に養殖場を構え、39年から事業開始。40年はニジマスの孵化10万尾、アユ2万尾、マス1万尾を育てる(38号、40年10月)。

熊川漁協でも、アユの採捕と放流に取り組み、一部を試験的に養殖。熊川水系の全域に棲息を広げたい目論見だ(63号、45年5月)。

58号(44年9月)では、松本直衛さんがウナギに代わる栄養資源として、水田でのドジョウ養殖に熱い視線を注ぐ。

67号(46年1月)には「町を鯉の名産地に!」の記事。水田開発のために作られた「先祖の遺産」でもある溜池を活用し、コイの養殖を提唱する。

124号(58年7月)の紙上暑中見舞いには、福島県水産種苗研究所の大滝勝久所長が登場。原発の温排水を利用し、ヒラメやウニなど育成す



ニジマスなどの養殖を行った三瓶養魚場



昭和56年当時の熊川河口のやな場



# 商業協同組合を 設立し市場の 拡大に備える



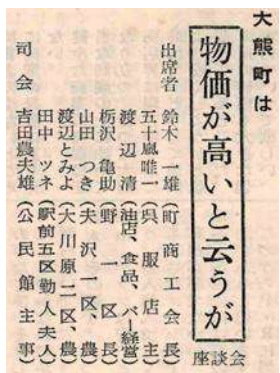
大熊町商業協同組合 直売所

## 大熊町は物価が高い？

22

号(昭和36年3月発行)で、商工関係者と農家、主婦などの町民が集まって、町の物価高をテーマに座談会を開いている。「地域発展のためには生産と流通の調和が大事」と促す司会の公民館主事に対し、売り手、買い手が率直に意見を交わす。「私共の方は双葉から毎日売りに来る。何かと物交ですますことができる」と夫沢1区の農家、山田つきさん。「大野は高い」は定着した評価のようで、駅前5区の主婦、田中ツネさんは、婦人会では町外で安くまとめ買いして、みんなで商品を分けていると言う。これに、「大熊でもまとめて買つと安くできる」と商店側。

大川原2区の農家、渡辺とみよさんは「町内の商店で買えば金がないときでも貸してもらえ」と地元の良さを語るが、これはこれで商店側としては「金のある時は町外の商店から買い、つまづけば地元商店から借りるのでは商店はなり立たない」と語る。27号(37年8月)の町民35人に対する



大熊町は物価が高いと云うが 座談会 (公民館報 22号)

る「世論調査」でも、地元商店街について「一般に他町村より品物が高値で困る」「品物が豊富でなく、高くて買いにくいから他町に行く」などと手厳しい。座談会は、もともとあった商工会の業種を広げて「新商工会」を組織化するタイミングでの企画だった。「消費者の皆様との間に度々この様な懇談会を持ちたい」と鈴木一雄商工会長。消費者と商店の「理解協力」に基づく、経済の好循環を目指している。

## 商業協同組合の設立

原子力発電所の誘致は商工会にとっても、十数年に渉る世紀の大事業。原発事業従事者という新たな消費市場で、町外の大企業と競つても「到底勝算は望み薄」とし

町民の意識調査から見えてきた商業の課題、原子力発電所の工事で変容する消費者市場。そして、不景気と円高の社会背景。その中で商工業者たちが探し出した道は「力を合わせること」だった。

て、町内業者は連携して昭和41年7月に「商業協同組合」を設立した。同年11月、組合は原発敷地の西門前に物資直売所を建設し、日用品及び食料品の販売を開始。夫沢簡易郵便局の事務とタバコの販売も請け負った。当時は500人の原発事業従事者が3000人規模となることを見込み、当面は赤字であっても「地元の利」を生かした良心的な営業継続を誓う(42号、41年12月)。



商業協同組合の現状(公民館報 42号)

## 小規模工業の育成を

11号(43年5月)には、川崎市の野上宇南金谷に福島工場を建設するとの記事。44年4月の操業開始を想定し、最初は50人程度、3年後には約

3000人の従業員を募集する見通しで、製造品目はカーラジオ。県のあつせんで誘致が決まり、「皆様と共に立派に育て上げ、大熊町発展に一役買って頂く」と喜ぶ。

一方、65号(45年10月)では、「職のない男」が「中学卒業生は金の卵、高校卒業生は銀の卵」「お嫁さんも奥さんも工場やその他で働く昨今」、中高齢の雇用先が少なくと寄稿で嘆く。「女の働く職場はもうたくさん」と中高年齢層の働く場の誘致を求めている。

「小規模工業の育成を」と呼びかけるのは、鉄工所経営の伊藤文夫さん(99号、53年1月)。「オイルショック以来の不景気」を原発の工事に救われた感があったものの、「発電所工事も、六号機と、保修関係を除いてはほぼ完了」。急に不況風が身にしみ、今更ながら企業体質改善の停滞を反省している」と率直だ。

伊藤さんは、企業の強化は当事者努力に基づくこと認める一方、町内の工事において地元業者が少ない現状を挙げ、地元企業に優先して町内工事を発注することで、小規模事業者を育ててほしいと期待する。



昭和44年に操業がスタートした、町内誘致工場第一号「エレカ電子福島工場」

## 当時を知る町民のこえ

関本好一さん89歳 下野上3区 弟と農業やつてくのの20代で会社を作った。簿記は会社をつくる前提条件だったけど、独学で簿記はちょっと難しく、町の中を探したら「会計事務所」っていう看板を見つけた。

行く「相談のお客さん誰も来ねえ。農家のあなたが何やるんだ」って税理士さん。「会社にするのに複式簿記勉強して」って言ったら珍しがって、いろいろ教えてもらった。1960年ごろかな。税理士事務所は商売にならなかったんだ。

## 知っていますか



セロテープは戦後出廻ったもので、これは自動車や電気の発明について生活に革命をもたらすほど便利なものです。中の狭いもの、広いもの、それぞれの特徴を生かして使ってみましょう。

ペンキ塗り…ペンキを塗る時塗りたくない部分にセロテープをはっておくと、きれいに仕上がります。窓ガラス…窓ガラスにヒビが入った時、セロテープをはっておくと、絶対大丈夫。植木…大切にしている植木が折れた場合、折れた部分をセロテープでくっつけておくと見事に更生する。顔のシワ…顔のシワをのばしてセロテープではって眠ると、きれいになる。ウソではない。…このほかに、まだいくらかでも便利な使用方法があると思います。(公民館報97掲載の一部を抜粋)



# 原子力発電所に寄せられた期待



原発工事のクレーン越しに昇る朝日(公民館報 49号)

## 第二の火

七

年の歳月第三の火はともる」  
昭和45年2月発刊の62号は、

表紙に志賀秀正町長の言葉を掲載した。39年に東京電力が原子力発電所の建設を発表後、町は大きく変ぼうしてきた。「私は為政者として、この地、この時に生を享けることを無上の喜びとする……」と、志賀町長の言葉にも万感の気持ちが入り込められる。

41年1月、大野、熊町両婦人会が主催した「町内政治問題研究会」(40号、昭和41年2月発刊)。町幹部が婦人会の質問に答える場だが、助役や教育長に交じって、東京電力福島原子力建設準備事務所の所長と次長も出席。原発に関わる質問は多く、町民の関心の高さがうかがわれる。

「原発設致によって町が豊かになり、工場が誘致され、労働者も農民も就職が出来て、よい町になるか、それによって出稼ぎ問題も解決されるかどうか」との問いに、東電の次長は、原発の構造から雇用への影響まで細かく説明。「10年先にはすくなくも固

定資産税は10億円前後となるだろう。但しこれは県に入るので町に全部入るのではないが、これ等をどのようにつかって良い町にして行くかという問題だろう」と次長。健康や防犯上の影響を懸念する質問には「心配は全くない」などと所長と次長が答えている。

記事「原子力発電所の建設準備進む」(42号、41年12月)は、土木工事が行われている夫沢の原発敷地を写真で紹介。「原発1号炉」(57号、44年6月)は、1号機の原子炉圧力容器の陸揚げの様子を伝える。

工事の進ちよくのみならず、原発は町発展の象徴としても登場する。49号(43年1月)の巻頭写真は、原発工事のクレーン越しに昇る朝日をとらえ、「大熊町の黎明」と表現。46年3月の原発1号機営業運転が目前に迫る67号(46年1月)は、送電線と朝日の写真に「一九七一年それは大熊町にとって第二の曙である」との文章を添えた。

冒頭62号の志賀町長の言葉はこう締めくくられる。「吾々の住むこの大熊町が、偉大なる発電源を持ち数多

くの国内の人々のために物心両面の光明を与え、日本における産業振興のために限りなき役割を果す地位にあることを自負する日の一日も早くらん事を切に望むものである」。

## 七年の歲月

### 第三の火はともる

昭和十九年から本格化された、東電の原子力発電所建設事業も、漸く本年十月には発着開始となる。  
足かけ七年間、親愛なる町民の理解協力が結実することの意味する。  
しかしその過程は長く、幾多の苦難を乗り越えての終末であるが、私は為政者としてこの地、この時に生を享けることを無上の喜びとすると共に、幾多先人、そして現世にあってその行を共にする。

「七年の歲月 第三の火はともる」(公民館報 62号)



原子炉圧力容器の陸揚げの様子(公民館報 57号)

## 東海村視察

39

年2月、大熊町議会総合開発特別委員など10人が、茨城県東海村を視察した(33号、39年4月)。

30年代当初に原子力研究所が設置され、国内で初めて原子力発電を實現した村は、誘致後に人口、世帯数、財政予算規模とも伸び、「六万五千人の人口規模」のまちづくり構想を持つ。ただ、視察の印象は「あまり原発に期待をかけることはまずいのではないか」という説明であり、東海村としては立派な農業村を作っていくと云う方針のように思われた」と報告する。

翌40年には、役場職員も東海村を視察し、原発誘致後の町の変化を見通すつとして(38号、40年10月)。メリットは、村財政の大幅な伸びに伴う道路、電話網など生活環境改善や住民所得の増加傾向。デメリットは、住民の生活費増大による農業への意欲減衰、インフラ等環境整備費の増大。「村の財政の伸長に従い村自体の環境整備費が増大し、財政はふ

## 原子力発電所の浸透とこれから

1

号機の運転開始から12年あまり。124号(58年7月)には、

科学技術庁福島原子力連絡調整官事務所長の牛尾一博さん、福島県原子力センター所長の吉田稔さん、東京電力福島第一原子力発電所長の住谷寛さんが「紙上暑中見舞い」に登場。原発やその関係者の存在が町になじんだことがうかがえる。

町外から赴任してきた3人も、まず町の施設の充実ぶりに目をみはり、牛尾さんと吉田さんは自然の美しさも評価する。住谷さんは、発電所

の用地取得の段階から「大熊町の皆様方には、絶大なご協力をいただき、発電所が完成し、現在では六基の原子炉が稼働しております」と感謝。「原子力発電の安全性の確保はもとより、原子力発電の安定運転を通じまして地域のお役に立つよう全力を尽くす所存であります」と結んだ。



昭和44年当時の原子力発電所1号機

父は木材業で原発敷地内の林を切り開く仕事もしていました。原発関連事業の裾野は広いので町民も経済的に豊かになったと感じられる部分はあったと思います。私も、大学に入れてもらったのは東電のおかげだと思っています。

元木 あや子さん







猪狩松一さん(77歳)  
熊川区  
R6・3・14聞き取り

20歳になるかならないかの頃、夫沢地区にとてつもない大きな建物ができるといふ話なの。聞いたのは、公民館の青年学級。あの時、志賀秀正町長が来たんだな。志賀町長が「これからは兼業農家でやっていくようになるから」と言った。うちら「兼業農家」ってわかんなかったんだ。当時は農業専門でやるのが当然で、あとは出稼ぎとかで、ほかに勤めて現金収入を得るといふことは頭さなかつたんだな。

最初、おやじに「不発弾探しに行つてこい」って言われて行った。あの場所は軍の飛行場だったから。まだ建物もねえ時、1列に並んで、探知機みたいな器械持って。1日11000円か12000円だ。他のところは土建でも10000円もええねえくらいのものであった。そこで初めて「ああ、こういう仕事があるのか」と思ったよ。

「電気屋さん、腰バンドしてカッコいいな」って、昨日一緒にやっていた人が、次は違う会社の仕事をやってる。現場で人の奪い合いだ。今では考えられないべ。働いてるのはほとんど農家。鹿島建設の人も工程は組む。でも、稲刈りだとみんな休んじゃう。それで鹿島がバインダー(稲刈り機)を各地区に買ってあてがったんだよ。「若い者は稲刈って、おやじさんは仕事出てくれ」と。そんなこと言つたつて、あの当時、我が家の仕事の方が大事だべ。農作業の時はみんな休む。小高の人は野馬追の時は来ねえ。現場の仕事どころではねえんだよ。

### 当時を知る町民のこえ

富岡の方から5、6人、バイクに弁当積んで、原発に通つていくわけだ。中に親戚の人がいて「見に行かぬえか」って。「よし、行つてみつか」って行き始めた。現場は何もなく、基礎を作るのにコンクリを練つたやつを運ぶ。我々は技術ねえから、やれつて言われたことをやってるだけだ。

だんだんと工事やつて、建物が形になってきたら、今度、機械メーカーが入ってくるわけだ。

こうして振り返つてみると、志賀町長、先見の明あつたな。発電所ができて、兼業すれば金入ってくる。そうすると、農家やるにしても機械も買うようになる。農家だけだと機械なんて買えねえから。勤めさ行つて、お金取



原子力発電所 建設工事の様子

で、機械を買つて、それで農業早くやって、原発で働く、それを繰り返してやってきた。町自身も潤ってくるつべ。基盤整備もライスセンターも、みんな原子力発電所あるおかげでいろいろ発展してきた。

うちはコメとタバコと養蚕が主だった。でも、タバコやつてると仕事さ行かれないわけだ。だから、タバコやめちやつて原発で金取つべと言つて。あと、ばあちゃん(母親)が好きで養蚕やつていたの「孫守りするか、養蚕やるか」と聞いたら、「孫と遊んでいた方が

いいわい」となつて、タバコも養蚕もやめちやつた。昔は、中学から帰つてくると、テーブル書き置きがあるんだ。「今日はどここの畑の桑」って。夜は煙草のし。チリチリになつたタバコを板の上で平にする。眠くて「明日試験なんだけどな」つて言つたつて宿題やる時間もない。とにかく帰つてきたら、農作業やらなきゃならねえから。中学生は労働力。俺らの同級生で高校に行かれる人は良かったんだ。

東電では45年働いた。でも、基本は農家だから。原発で働いた金を農業に使つたんだ。原発で仕事していた時には、最先端の工事現場だと思つてから誇りを持ってやつてやっていた。こんな風になつちやつたけど、実際には原発で潤つたし、それで俺もやつてきたからな。



原子力発電所 建設工事の様子

発さ行きながら、田んぼ作つた。畜産は普及所の先生に勧められて、50万円借りて3頭だか買ったのが始まり。肉牛で仔牛を生ませる。うまくいって震災前までやつていた。津波で親牛8頭、仔牛6頭流されちやつた。うちの目の前は海だから、震災前、朝起きると一番に海さ行つて手合せてたんだ。でも、津波で持つていかれてから一度も手合せてたことねえ。だつて全部海に持つていかれたんだ。今まで一生懸命働いてきたやつ、みんな、海さ持つていかれた。

### 公民館報 町民こぼれ話

#### 駅名変更に関する要望 吉田 信清

東京電力福島原子力発電所の建設工事は、原子炉圧力容器の取付けによって、第一号炉工事の90%が終り、いよいよ来年は運転開始の運びになるとのことである。

原発の町としての大熊町の名は、今や全国に知れわたつていて、この工事の完成をしておに、参観人の数もとみに増してくるであろう。遠方からの来客も少なくないと思ふ。

それにつけても、大熊町のまた原発玄関口に当る駅の名が「大野」ではどうであろうか。如何にもよそよそしい感じである。

素通りの旅行者も、駅のプラットフォームの掲示板に「大熊」と表示されているのを見たら、ああ、ここが原発の大熊町かと注意をひかれるであろうが、「大野」では、少くとも遠方の方は大分気づかぬまま通り過ぎられるにちがいない。

今が改名の潮時ではなからうか。町の指導者層の中には、やがて広域合併が実現した暁には、もっとス

マートな町名をといった考えをいだいている方もあるかも知れないが、もしもそのような考えから駅名の変更をちゆうちよよされているとしたら、それは少しく認識不足のような気がするのである。

なぜならば、広域合併によつて名称が問題となるのは、新たに誕生する地方公共団体についてであり、合併以前の町名は、地名としてそのまま残るのが通例であつて、それまで改めなければならぬという理由は見当たらないからである。

中には些細な事として顧みようとしない方もあるかも知れないが、それはセンスの相違で仕方がない。しかし、私は「原発の町として、今や全国にその名を知られ、かつ発展の途上にあるが大熊町」としては、早晚実現を期さなければならぬ案件の一つであると信じて疑わないのである。町当局並に議員の皆さんの御配慮いただけたら幸いである。

(公民館報 57号掲載)



昭和42年  
大野駅前







# 館報 おおくま

おもな内容  
 2面…県総合体育大会  
 3面…家庭生活調査、清流  
 4面…行事お知らせ  
 5面…少年団の交流  
 6面…文芸  
 7面・8面…みんなのひろば

発行編集 大熊町公民館  
 印刷所 新栄社写真美術印刷



## 親子読書

やあ、ほんやさんだ  
 お田さんかきめる  
 わたしが遊ぶ  
 楽しい絵本を  
 お田さんと、子どもの  
 会話は、はげむ  
 子どもの、夢があり  
 田親の、願いがある  
 として  
 親子のふれあいが  
 はぐまれている

公民館では、親子の読書活動に力を注いでおり、市内九地区の親子読書会を毎月巡回し、楽しい絵本を配本している。子ども達からは、公民館の本やさんで親しまれ、親子の読書活動は盛んになりつつある。  
 (写真は七月二十四日 熊地区親子読書会で撮影)

「親子読書会」で楽しそうに絵本を選ぶ親子。各地で本に親しむ機会が増えた(111号)

## Chapter 03

公民館報から見る

# 大熊町の教育

合併直後の厳しい財源の中において

も、小中学校の教育環境の整備は喫緊の課題だった。大野中学校舎の新増築をはじめ、各小中学校の設備の充実が図られていく。やがて生徒数が減少し、中学校は統合。それに伴い新築された校舎は、館報紙面で「教育の殿堂」と称された。社会教育においては、公民館の開設により、町民の学習活動が活発に行われるようになった。その内容は、家庭教育、産業、政治、スポーツなど多岐にわたる。合併間もない町にとっては、活動を通じた町民同士の交流も目的の一つとなっていた。昭和50年代に入ると、各地で親子読書会が開かれるようになり、町民の間に読書習慣が広がっていく。図書館建設への思いが芽吹き始めていた。

## おおちゃんARの遊び方

- 1 下部の二次元コードを読み取ります。
- 2 カメラへのアクセスが求められるので「許可」を選択します。
- 3 カメラが立ち上がるので、上部の公民館報を読み取ってください。



素敵な映像が流れるよ!



ちょっと息抜き

## 公民館報 町民こぼれ話

### 感心な双農高生

南金谷の人

先日の大雪の際、貴婦人用のハンドバックを拾得した双農高生三年のE君が、これを近くの民家に届け出た。見覚えのある家人から無事本人の手に届けられた。  
 拾得物が無事届くということは当然であるといえればそれまでであるが、思うにまかせぬ世の中。若いこの学生の善行に対して、落し主は勿論、近隣の人々が感心している。

(公民館報 55号掲載)



### 昔の思い出

熊二区館 坂本甫 73歳

私達子供の頃旧七月十四日の晩、熊町間の田の周辺の道や畔を利用し、館の子供が敵味方に別れて「火振」という催しがありました。双方の陣地に大火と小火(薪を積み重ねたもの)を造り、初めに我が陣の小火を焚き陣の在りかを示し小麦藁の松明に小火より火を移しそれを振り、或いは敵方に投げつけながら相手の部落名を呼び「奴ら、馬鹿奴だ、アンボ(菓子)買いにやったらば、アンボ、と言う事忘れて猫のしっぽ買って来て、いろいろの角こに、おつたてて、ニョーニョカソニョと拝んだ」叫びながら敵陣の火振に松より火を付けた方が勝ですが自分らは町の大火には焚いた事はありません。町は大勢いの為に二、三方から攻め込まれお火が付けられ空を赤々と焦がし焚かれてしまうのです。それを見届けると敵方子供らは自から自分の陣地お



お火に付け焚いて終りですが明日からは昨夜の敵は今日の友で昨夜事を語り合う良き友達でした。今になり考えると農薬の無い時代大人が子供を利用し稲などの害虫防除が狙かと思いません。火の明にとんで死滅する蛾やウンカなど…此の催しも昭和初期で姿を消してしまいました。それは農薬の普及と子供の少なくなつた事が原因でしょう。

(公民館報 116号掲載)



# 新校舎建設で教育環境の充実へ



大野小旧校舎での最後の卒業式

## 大野・熊町中学校の取り組み

**合** 併時、町内には大野と熊町を冠する小学校2校と中学校2校があった。

4校に対する町の監査結果(29号、昭和38年2月発刊)によると、当時、大野中学校の生徒数453人、熊町中学校351人、大野小学校671人(うち中屋敷分校34人、養護学級16人)、熊町小学校の児童数585人(うち夫沢分校45人)。

同号は「町内学校めぐり」として、4校の校長に学校の様子を聞き取り。熊町小は「体力と学力の両全」のため「完全給食」に取り組む。大野小、熊町中は学力向上を課題に掲げ、大野中は特別教室等教育環境の充実を求めた。

学力向上は、県の教育界全体の課題でもあったようで、「本県の学力は、他県に比して低く、特に純農村がよくない」と、熊町中学校は昭和38〜39年度、浜通り地域で唯一、県の学力向上推進指定校に選ばれた(33号、39年4月)。

研究課題は「学習意欲を高めるための指導法」。学校だけでなく自宅での予習復習が欠かせないが、「農村の子弟はよく家業手伝をするが、家庭学習は余りしていない」のが実情。自宅に机がない子、居間で勉強する子も珍しくなく、家庭学習に保護者の理解を呼び掛けるも「本校のみが群を抜いて優秀な成績をおさめること」はむづかしいと思われる」と現実を見つめている。



熊町中学校が学力向上推進指定校となったことを伝える記事(公民館報33号)

## 校舎の整備

生徒数の減少などによる中学校の統合や、校舎の新設により学習環境の整備を図るなど教育環境の充実に向けた取り組みが進む。それは、町の未来を担う子どもたちの希望を育む取り組みでもあった。

## 教

育施設の中で、大正12年築の熊町小の新築は急務だった。PTA会長は「老朽危険校舎」の西半分は南に傾き、東半分は北に傾いていると訴え、昭和39年2月に町長などに新築を陳情(33号)。同じ敷地に建設が決まり、45年に鉄筋コンクリート2階建の「デラックス」な校舎が完成している(64号、45年7月)。

熊町小ではその後、児童、教員、保護者が一緒に校舎周りの植栽に取り組み、54年に全日本学校環境緑化コンクールで、文部大臣賞、農林水産大臣賞、日本放送協会会長賞を受賞。これを記念し、校舎玄関前に「大きく育て」と書かれた記念碑が設置された(106号、54年7月)。

一方の大野小。52年度の教育委員会方針に「木造老朽校舎の早期改築を図る」(96号、52年6月)とあり、55年度に新築工着工(113号、56年1月)。野上から下野上に場所を移した。「一歩校舎に足を踏み入れた時その素晴らしさに驚きました。よく磨

きぬかれた校舎、心豊かさを物語る鉢植の花、それは鉄筋コンクリートの校舎にはない温かさそのものでした。その中に生活してきた人、現在生活している子どもたちの姿そのものであり、それは一朝一夕では築き得ることのできない姿をみることでできた。56年4月、大野小に着任した大崎猛校長は、町内最後の木造校舎の印象を記す(115号、56年5月)。57年3月、大野小新校舎が完成。旧校舎では、卒業生62名の最後の卒業式が行われた(119号、57年3月)。

## 環境緑化で文部大臣賞を受賞

熊町小学校では、全日本学校環境緑化コンクールで、54年度に文部大臣賞、農林水産大臣賞、日本放送協会会長賞を受賞。これを記念し、校舎玄関前に「大きく育て」と書かれた記念碑が設置された(106号、54年7月)。



「環境緑化で文部大臣賞を受賞 記念碑を建て祝う」(公民館報106号)

## 分校の廃止

**中** 屋敷地区に、大野小の分校として設置されていた中屋敷分校は、44年3月31日、廃校となった(56号、44年4月)。

「昭和22年、戦後の開拓入植者子弟のために設けられたこの分校」。29号のまとめでは34人が在席していたが、閉校時には8人に減少していた。廃校と同時に、スクールバスが設置され、中屋敷の子どもたちは大野小本校にバスで通うこととなった。

熊町小の夫沢分校は、町史によると46年3月をもって、熊町小本校に統合されている。



大野小旧校舎から巣立つ卒業生たち



大野小新校舎の工事の様子



中屋敷分校 閉校式の様子



## 大熊中学校の誕生

**大**

野中と熊町中の統合は、合併当初からの懸案だったらしい(33号、39年4月)。

統合すれば、大野中学校舎の利用が現実的だが、「熊町側特に小良浜などでは問題がある」と登校距離の課題を町教委も認識(40号、41年2月)。熊町地区の住民の賛意をまとめられずにいた。

50号(43年3月)、吉田正雄教育長は「中学校統合について」と題し、改めて統合方針を打ち出す。当時の生徒数は大野中で296人、熊町中で286人。人口減少に伴い、生徒数は毎年減少。小規模といえる現状では、教職員定数の問題から「思う様に専門的な教師を得ることが困難」などとし、「学力向上のためにも一校に統合すべき」と主張した。校舎は新しい場所に新築することも掲げ、46年度までに実現したいと明示した。

統合が現実となったのは48年4月。新校舎がないままの統合で、両校舎はそのまま大熊中学校の「大野分室」

「熊町分室」となった。

50年4月、夫沢中央台の大熊中学校での教育が始まる。「建設と学習の併存という姿で実質統合に踏みきりました」と吉田農夫雄教育長が語るように、できた部分から使い始め(87号、50年10月)、総合落成式は52年3月に開催された(96号、52年6月)。



建設中の大熊中プール



大熊中生徒の授業風景

## 幼児教育と保育

**大**

熊町保育所は41年5月、定数60人で開所。開所時点で26人だった園児は、12月時点で46人に増え、42年度は定数75人とする 것을検討中と、二ノスの高さがうかがえる(42号、41年12月)。

45号(42年5月)には「農繁期と子ども」の記事。保育所では農繁期に限っての入所も可と案内。繁忙期の子どもの預け先としても機能したようだ。また、同記事に「幼稚園」の記載もある。町立幼稚園の設置に先駆け、大野地区には私立幼稚園が開かれていた。

町立幼稚園は、熊町幼稚園が45年5月、熊町小併設で設置された。大野幼稚園は47年5月、こちらも大野小併設での設置である。

50年の園児数は大野幼稚園77人、熊町幼稚園98人(85号、50年5月)。幼児教育の充実を図るため、52年に新築の大野幼稚園が完成し、大熊中学校の熊町分室を利用して熊町幼稚園も53年度から新築の園舎に移転。太田芳一郎教育長は「就園率も九十



大野幼稚園の外観

五・三パーセントと郡内一の完璧さ」と幼児教育への自信を隠さない(103号、54年1月)。

## 県立高校

**6**

号(32年8月)に「浪高大野分校を独立校とせよ」という見出しが躍る。

浪江高校大野分校は、33年に県立双葉農業高校として独立。45号(42年5月)では「完備された畜舎群、近代化された農業土木科実習室、すばらしい校庭、そしてまれにみる近代的

体育館が野上の森に出現」と評される。同年の生徒数は454人。郡内唯一の農業高で、町出身は約3分の1、いわき市や小高町(現・南相馬市)から通う生徒もいた。

## 伸びゆく

### 双葉農業高等学校

昭和33年に県立本校として独立した双葉農高で去る5月8日盛大に体育館の落成式が行われた。

かつて特色ある昼間定時制高校として全国的にその名を知られながら施設設備も不充分で職員生徒共に苦闘した当時を知る当日の参列者達はその完備された畜舎群、近代化された農業土木科実習室、すばらしい校庭、そしてまれにみる近代的体育館が野上の森に出現したことにびびり、驚きの目をみはった。

双葉農業高校体育館の落成を伝える記事(公民館報45号)

## 公民館報 町民こぼれ話

勉強の奥にあるもの  
大熊中生徒旅先での親切  
— お礼の手紙から —

佐藤善右エ門

前略ごめん下さい。とても嬉しいままに、ペンをとらせていたゞきました。

私本日、磐越東線上り小川郷駅三時五八分発の列車で赤井駅まで参りましたが、私の乗った車輦に御校の女生徒さんが四人乗り合わせて腰を掛けておられました。一つだけ空いている席をみつめて、妻に腰をかけさせましたところ、それを見ていた御校の生徒さん四人のうち手前にかけていたお二人が同時に立って私に席をゆずって下さいました。

私は美智子さんの名札をつけておられたお方の席をおかりしました。美枝子さんとおっしゃるお方も立って下さいました。

小生は、学校帰りの中学生とばかり思い「最近の中学生にしては珍らしいことだ。」と感心しながら

席をおかりしたわけでしたが、種々お話ししてみますと郡山市に「合唱コンクール」に出かけての帰りであることがわかり、「生徒さんもずい分と疲れておいでの苦悩の中に…。一生懸命にコンクールに精魂を打ち込んで…。しかも郡山から帰られるのだから…。普通列車で…」と思うと胸が一杯になって涙があふれそうになりました。

私はこう思いました。「大熊中の合唱団(クラブ)は立派に、美しく、優勝している。」と。音楽も美術も、それは人の心を美しく、やさしく、そしてはげしくするために学ぶものでしょう。

みなさんは、やさしく美しい気持を…。老人をいたわる心を…。はげしい勇気のある心で実行して下さいました。

よいことを実行するにはいつもはげしい勇気と決断が必要です。だから私は、大熊中の合唱クラブは勉強の奥にある一番大事なものを、しかと身につけていらっしやる…。これが一番の優勝旗なのだ、と思ったのです。

ほんとうにありがとうございます。クラブ員の皆さんが、こうした

心の持ち主がちがいませんし、いや、大熊中の生徒さん全体が、こうしたやさしく美しい心の持ち主のように思われてなりません。

丁度、私は今、福島市の大原病院で胃を手術したばかりで保養にこちらに来ておりますので、校長先生のお名前もわからず、失礼いたしますが、きつと、校長先生はじめ、諸生方も一生懸命でいらっしやるにちがいないし、クラブ担当の先生も立派にちがいないとつくづく考え、心から御礼を申し上げます。

今日私に席をゆずって下さった生徒さん、合唱クラブの方々、クラブ担当の先生方にもよろしく御伝言下さい。

末筆ながら妻からもくれぐれもよろしくとのことでございます。

九月二十七日  
伊達郡保原町  
佐藤善右エ門  
郵便九六〇一〇六

大熊中学校長先生  
呈下  
…原文のまま…

(公民館報77号掲載)



# 町民の健康増進と交流深める社会体育



町民体育大会を楽しむ町民

毎年恒例となった町民体育大会をはじめ、球技大会などの各種スポーツ大会の記事が紙面を賑わせている。町民が心地よい汗を流す時間は交流を深める機会にもなっていた。

## スポーツの町が躍動

**海** かー山か！息づまる接戦を展開「の見出しで、53号昭和43年9月発刊）が伝えるのは町民体育大会だ。昔から荒天が多いとされる9月1日はやはり雨模様。午前6時、開催の決め手は雨の中でも見通せた日隠山の姿。「……日隠山が見えたら雨が降らない……これこそ私達の先祖以来の生活体験からの言い伝えだ」

雨は上がったらしい。町内各地区がもれなく参加し、例年の「野上、駅前、大川原」の優勝争いに熊川地区が割って入り準優勝を果たした大会を、館報は「画期的」「町民自らの体育行事として力強く動き出した」と喜ぶ。

の第13回郡総合体育大会でも優勝(87号、50年10月)。13回中、町は計7回の総合優勝と強さをみせる。一方で、「町民体育祭の選手選考は全く区長の悩みのたねである」とぼやく記事も(47号、42年9月)。選手から出場の承諾を得るのは一苦労らしく、ある区長の話として「体育祭さえなければ区長何年やってもいいんだが」。ただ、その区長、他人からみれば「全く喜んで体育祭に努力しているように見える」らしい。このような町民の尽力も、社会体育を振興させる一助となったのだろう。



スポーツ関連の記事が、公民館報に並ぶ(公民館報53号)



町民体育大会 玉入れ競技の様子

## 運動を日常に

**体** 育立町 幸福とは生きている事である」。町の44年度社会教育の柱の一つは「体育組織の完備」。健康に生きることを幸福と定め、「体育とは体と心の訓練」と説く(58号、44年9月)。同年、町スポーツ少年団を結成(57号、44年6月)し、スポーツを通じた青少年育成にも力を入れていく。

93号(51年11月)の表紙を飾るのは、町総合スポーツセンターでトレーニングに励む女性たち。スポーツセンターの整備は、48年の体育館着工を皮切りに段階的に進められ、58年度に全ての施設が完成。利用者は急増し、町民のスポーツ熱は、太田芳一郎教育長が保護者がスポーツに熱中し、子どもと過ごす時間が少なくな



町総合スポーツセンターでトレーニングをする町民

るのではと懸念するほどだ(125号、59年1月)。

日常生活で健康に留意する町民も。夫沢の永井善子さんは、ジョギングやウォーキングにいそむ町民の姿を見て、自らの「自転車愛用も健康法のひとつではないか」と思いつく。過去にバイクを愛用して「病弱になった」という実感から、日々、孫を背負って富岡町、浪江町にも自転車で向かう。健康的で経済的。「皆さんも、この一石二鳥の利となる自転車を見直して下さい」と呼びかける(94号、52年1月)。



昭和56年に行われたマラソン・ジョギング大会

## 大熊中の体力づくり

**大** 熊中学校は51〜53年度、文部省の「体力づくり研究」の指定を受け、重点的に体力向上に取り組んだ結果、全国優良校として表彰された(102号、53年11月)。

50年4月に大熊中が新校舎で学び始めて1年。指定期間は、51年2月の体育館完成から、徐々にグラウンド、テニスコート、プールなどが整備さ

れていった年月と重なる。

53年度の中2男子は、反復横跳び、50m走、持久走などスポーツテストの全12種目で全国平均を上回った。1年目の分析で「非常に劣る」と判断され、独自トレーニングを続けた懸垂の結果は、50年度の実績や全国平均と比べて飛びぬけている。53年度の郡中体連は、10種目中4種目で大熊中が優勝、3種目で準優勝、1種目で3位の好成績。校長は「おれたちだけ、どうして体力づくりやんだべ……」という生徒の本音が、中体連で自信に変わったと報告。「勉強だつてこの体力と忍耐力できつとのりこえられると思つ」という生徒の言葉が力強い。



「文部省指定 体力づくり研究の成果」(公民館報102号)



# 学習活動でつくる 人と地域社会



様々な世代を対象に行われた公民館活動

町で学ぶ楽しさ、  
町をつくる喜び

**今** までの自分になかったものが  
少しずつ自分のものになって  
いくということは、どんなに楽しい  
ことか

昭和54年10月発刊の107号に寄  
せられた「熊町一主婦」の言葉だ。熊  
町地区にできた小さな民謡サーク  
ル。活動日の母は朝から落ち着かず、  
帰宅後は習ったことを家族に披露す  
る。日常生活の中に「学ぶ」場がで  
たことを喜び、実際に楽しむ母の様  
子から自分も「なにか学んでみたい」  
と言っ。読んでいる側にも、ワクワク  
が伝わる投書だ。

大熊町公民館は30年に発足。2号  
（昭和31年11月発刊）で掲げるとおり、  
それから、青年学級、婦人学級、若妻  
学級、高齢者大学等、世代や関心に合  
わせた活動団体の育成や、講座等の  
充実に取り組んできた。「公民館を一  
歩出れば気軽にお互いが語り合う場  
所がない」と昭和30年代の青年学級  
生が振り返る言葉（122号、58年

1月）から、公共施設や娯楽施設が少  
なかつた時代に、館が果たした役割  
がうかがえる。

研修内容は生活に即して設定さ  
れ、活動や成果はおのずと館外に広  
がった。若妻学級は、「家庭と子供を  
見守りながら時期的に無理のない現  
金収入の道」としてナメコ、ヒラタケ  
などの栽培を実践。実際の出荷につ  
なげ、学習から生産へと意欲を見せ  
る受講生を「誠に意義深く価値の高  
いもの」と、指導役の愛場仁さんが見  
つめる（48号、42年11月）。

青年学級は、奉仕活動の一環で「熊  
川海岸に一大キャンプ場をつくるた  
め」、土地を借りた（63号、45年5月）。  
「キャンプ場をつくり、看板をつく  
り、（中略）標識を建て、海水浴場一帯  
の草を刈り、国旗掲揚塔をつくりあ  
げる。熊川海水浴場建設は文字通り  
大熊町青年学級生の意欲と活動の上  
に実現した」（64号、45年7月）。

婦人会の活動は、大野、熊町両婦人  
会主催の「町内政治問題研究会」（40  
号、41年2月）、「住みよいふるさとつ  
くりを考える学習会」（94号、52年1  
月）など多岐にわたり、町の課題を知

昭和30年の発足以来、公民館の活動は  
町民のこころ豊かな暮らしや、  
明るい家庭づくり、地域づくりを支えてきた。  
その活動を伝える記事の一つ一つに  
人間的な成長を目指す町民の意欲と笑顔が垣間見える。

り、考えよつとする姿勢が伝わる。

学級、講座は年を追うことに充実  
し、126号（59年3月）の新年度の  
学級生・受講生募集の記事では、25の  
学級、講座が並んでいる。



グループ活動に励む若妻学級の生徒

（11号、34年3月）。

野上3区婦人学級では、「妻は夫に  
何を望むか。夫は妻に何を望むか」を  
研究課題に据えた、男女相混じった  
話し合い学習。この学級の熱心な「支  
持者」という鈴木保蔵さんは、3回の  
話し合いで「勿論結論などは出てこ  
ない。でもお陰様で私自身の家庭が  
明るくなってきたことは事実です。  
（中略）私達の家庭、私達の部落が本  
当に明るくなり、お嫁さんに行くな  
ら野上三区だよ！」と云われる様にな  
りたい」と語る（14号、34年10月）。

公民館でも39年5月、新たに家庭教  
育学級が開設された（34号、39年7月）。



家庭教育学級 話し合いの様子

**34** 年2月、下野上3区では念願  
の「母子座談会」を開催。「オセ  
ンペイをほりほりかじりながら」母  
と子が約2時間の意見交換。「お互い  
に反目していたしこりも腹を割って  
話し合ってみれば、事のおこりは些  
細な事」と、継続開催を決めている

明るい家庭を

## 地区ごとの公民館活動

**行** 政区単位での「部落公民館」の  
設置は、町公民館の分館組織  
という位置づけで、公民館発足時か  
ら目標に掲げられていた。

47号（42年9月）には「公民館部落  
分館あいついで建設される」の記事。  
41年度には野上3区、下野上3区、大  
川原地区に分館ができた。さらに、熊  
小の改築で出た木材の払い下げによ  
り、4地区で分館建設が進み、「今年  
度中には町内各部落分館が完成する  
予定」。

55号（44年2月）では、「某部落公民  
館長」の投書で「部落全体に公民館が  
建築されたことは誠に喜ばしい」と  
し、行政区単位での活動の充実に向  
けて、町公民館の指導を求めている。  
98号（52年10月）は、夫沢1区と下野  
上1区に分館活動を紹介。下野上1  
区の杉本幸一区長は、公民館長とし  
て「何をやればよいのかまだはつき  
りとはつかんでいない。恥ずかしい  
次第である。公民館は集会の場所だ  
けではないはずだ」と、試行錯誤す

る。「一番手ごたえを感じたのは盆踊  
りの開催といい、実施2年目のこの  
年は約150人が力を合わせた。  
「やらなければならぬことはた  
くさんある。余りあせると逃げてし  
まう」と杉本区長。「社会教育はみん  
なで考えて一歩でも前進すること  
ではないかと思う」と語る。

## 「読書のまち」のめばえ

**や** あほんやさんだお母さんが  
きめるわたしが選ぶ」。

111号（55年7月）の表紙には、  
大切そうに本を抱く女の子の姿。町  
に図書館がなかったこの頃、公民館  
は地域での「親子読書会」の結成を促  
し、申し込みを受けて各会に所蔵の  
本を届けた。

公民館の図書室は、少しずつ蔵書  
を増やしながら発展していった。11  
号（34年3月）には「公民館図書は一日  
平均10冊ほど貸し出されています」と  
ある。県の移動図書館車である「あづ  
ま号」からは55冊借り受けており、  
購入に加え県から本を定期的に借  
り、書棚を充実させた。



道

大川原一区 志賀 栄子

私の好きな詩に、次のような詩がある。「自分には自分に与えられた道がある。広い時もある。狭い時もある。思案にあまる時もある。しかし、心を定め希望をもって歩むならば必ず道はひらけてくる。深い喜びもそこから生まれてくる。」若い頃、私に与えられた道は、教師という道であった。数多くの子どもたちを受け持ち、精いっぱい頑張った。今は主婦の道をこつこつと歩んでいる。

これまでに私には忘れられない狭い道、下り道があった。それは三才にして肺炎をこじらせて息子を亡くしたことである。亡くなった息子はちょうど可愛い盛りで、親がいうのもおかしいが賢い子どもであった。亡くなって三十年もたっているが、いまだに忘れられない。

私は、俸給とりの家に生まれ、農家に嫁ぎ、それなりに苦勞もした。しかし可愛い子どもたちに恵まれ幸福だったが、この長男息子を亡くして本当に悩

んだ。共働きをしていた為に子どもへの細かな配慮が足りなかったのではなからうかと深く後悔し、教師を辞める事を決意した。そして実家の母に相談に行った。その時母は、私にこう言って諭した。「なんで亡くなる前に辞めなかったの。亡くしてから辞めても、息子は返って来ないし、百姓の出来ないお前には教師の道の方が、残された子どもの為になるんじゃないの。」と。

私にとって悲しい悲しい人生の下り坂であった。どん底に落ちた気分だった。親しい友は、「性格まで変わったようね。」といった位だった。この詩のように思案にあまった時、母に諭され心を定め主人のあたたかい援助もあってやっと歩み始めた。

今は退職して十年目に入った。主婦業も農家の仕事も一応、へたながらも覚えて、与えられた道を歩んでいる。

去年は五十肩になり、あゝ老化はじまったのかとがっかりもしているが、二人の孫の成長が楽しみで、

せつせと宅急便でいろいろなものを送って喜ばれている。

「おばあちゃん」とまわらぬ口調で呼ぶ元気な声を聞くと疲れもふつとんでしまうこの頃である。

人にはそれぞれの道がある、自分に与えられた道を精いっぱい助けあい励ましあって歩む時、自ら楽しい道がひらけてくるのではないだろうか。

(公民館報119号掲載)



公民館内の図書館で本を選ぶ子どもたち

「36年5月12日、中屋敷地区に移動図書箱をおく」と、60号(44年11月)掲載の年表にある。町内各地に本を届ける取り組みは、この頃から始まっていたようだ。熊町小4年、末永雄一さんが「早く移動図書館車『ひまわり号』ができればいいかな」(122号、58年1月)と、心待ちにした町の移動図書館車は、58年1月に納入された(123号、58年3月)。数千冊を収容できる「ひまわり号」の名称は、小・中学生の公募により決定した。図書の普及活動を町民も後押しした。公民館活動としての「親子の読書会」は54年7月に誕生(106号、54年7月)。第1回目の会合には16人が出席し、本の魅力を子どもたちに伝えるための活動内容等が話し合われた。

当時を知る町民のこえ



元木 あや子さん(73歳)  
熊2区  
R6・3・12聞き取り

娘が幼稚園に入ったころ、公民館での親子読書会に入り活動を始めました。

当時は公民館の一室が図書室で、歴史物とか子どもの本とか、いろんなジャンルの本が本棚に雑多に置いてありました。そこに週何回か通って、仲間たちとボランティア

アで本の整理のお手伝いをして、館の図書担当の方の本の購入に付き添ったりしました。活動の目的は2つ。子どもたちに読み聞かせをしたいということ。そして町に夢の図書館建設をお願いすること。自分たちがそんな活動をしてたら、図書館の要望も評価していただけるかなと思っていました。

公民館に通うようになったのは、お花の稽古がきっかけで、そこから親子読書会を作りました。最初は軽トラックのような小さな車でしたが、巡回図書も実現し、本の入れ替えも自分たちでやりました。あの小さな図書室にはすごく思い入れがあります。

公民館には職員さんが4、5人いたように思います。すごくアットホームで、やってほしい教室を提案すると、すぐ「やりましょう」と形になりました。あの頃の公民館での経験や友人は今でも私の宝物です。

当時、私は英語塾をやっていたこともあり、町の国際交流のお手伝いもしました。自分の子どもも

含め、大熊にいても外国の人と触れ合える経験をさせたいという夢を持っていたので、姉妹都市のバサースト市との交流は喜びでした。バサースト市から届いた文書を翻訳していた時に、戦時中、日本軍がオーストラリアまで行軍していたことを知りました。バサースト市の高齢者の中に姉妹都市締結に反対する人がいたというくだりがあり、自分の認識不足を感じました。

社会教育委員をしていたころ、自宅の塾に不登校の子どもが来るようになったことから、フリースクールをスタートしました。「わかば教室」として、双葉郡8町村内の学校と連携して徐々に元の学校に戻る手伝いをしていました。

振り返ると、公民館の活動で機会を与えていただいたことが、私の土台となっている気がします。講座に入って、いろいろな人とつながって、社会課題を見つけて、自分の関心と合わせて、町の中で形になっていく。それは、私にとっても幸せなことでした。



大熊町生涯学習課だより

# 公民館報 おおくま



文学・歴史講座開講式



史跡めぐり

- 平成22年度生涯学習課事業報告……………P2~3
- 平成23年度受贈生募集……………P4
- 国際交流事業……………P5
- シリーズふるさと再発見……………P6~7
- ふれあい広場……………P8

No. 214 平成23年 4月  
(2011)

公民館報は今回対象とした年代以降も、継続して発行されました。町民の手に届いた最後の館報は213号。2011(平成23)年3月発行です。

同年3月11日、東日本大震災が発生。翌12日から、東京電力福島第一原子力発電所の事故に伴う大熊町の全町避難は始まりました。この時、次の館報はすでに最終確認を終え、4月の発行に向けて印刷所へ入稿されていました。

当時の編集委員長だった庄子ヤウ子さんは、震災後、避難先の会津若松市で校了済の館報を思い出し、印刷所に掛け合い、数部だけ出力してもらいました。

配られることのなかった214号です。

## 町の記録を残せたことをうれしく思う



野馬形区 元編集委員  
庄子 ヤウ子さん(77歳)

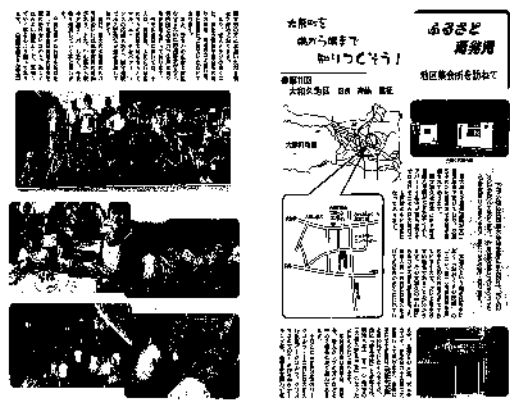
震災の数年後、「館報を出すはずだった」と思い出したの。印刷所にデータがないか聞いてみたら、「あります」って。A3用紙に印刷してくれた。

大熊町の公民館は館報を独自で出してきた。「これは誇れるものだ」と言われて、私は先輩から編集委員を引き継ぎました。委員は5〜6人いたかな。震災前の10年くらいは編集委員長をしていました。毎月1度の発行は大変です。でも、みんな好きでやってね、ととってもとっても楽しかった。編集委員に限らず、文化センターには人と活動が集まっています、誰もが社会教育

に関わることができました。編集長の時、一番力を入れたコーナーは「ふるさと再発見」。館報担当の職員と各地区を訪問しながらまとめました。町内の郵便番号が若い979-1301の夫沢地区から始まって、1308の下野上地区まで。その後も「旧地名」地区集会所「などテーマを決めて、町史を調べたり、長老の話を聞いたり。私自身、町のことを知ることが楽しかったし、自ら学ぶことで愛着も湧くでしょう。日常の風景でも「昔、ここでこんなことがあった」と思いをはせることができます。

読み返すと、今はもうない建物や行事も多いなあ。震災の前後で、地域の文化の継承に「段差」ができました。町民が地域の中で同じ行事を経験しながら時代に合わせっていくような、地続きの変化はもはや望めない。

毎月毎月、館報で伝えられることはささいなことだったかもしれませんが、時が過ぎて、ましてこの13年があつて、町について少しでも記録に残せたことをうれしく思います。これから大熊町に暮らし、町をつかっていく人たちに「こういうことを残してくれてよかった」と思ってもらえることがあれば、私は幸せです。



「ふるさと再発見」の記事は5ページの二次元コードから閲覧できます。



町制施行70周年記念  
公民館報から読み解く大熊町の歩み

# つなぐ

発行／令和6年11月

発行元／大熊町教育委員会

〒979-1306

福島県双葉郡大熊町大字大川原字南平1717

電話 0240-237194 (生涯学習課)

企画・編集／大熊町教育委員会生涯学習課

福島大学「地域×データ」実践教育推進室

制作協力／有賀美沙希・大森海七・佐藤寿羽・緑川泰成

加藤穂高・久保田彩乃・鈴木敦己・斎藤毅・千葉偉才也





福島県大熊町

[大熊町公式HP]

<https://www.town.okuma.fukushima.jp>

